

静岡英和学院大学

キリスト教研究年報

創刊号

キリスト教研究年報
二〇一三年三月

2013年 3月

静岡英和学院大学 キリスト教研究会

静岡英和学院大学
キリスト教研究会

キリスト教研究年報 創刊号

特集：キリスト教と音楽

目次

創刊にあたって	静岡英和学院大学学長 武藤 元昭	
バッハの音楽を巡る旅 —演奏とお話—	現代コミュニケーション学科 菊池みち子	1
ルターの宗教改革運動を支えた音楽の働きについての—考察	人間社会学科 伊勢田奈緒	9
高齢者における讃美歌を歌う会の意味 —インタビュー分析より—	コミュニティ福祉学科 鈴木 幸子	21
菊池みち子先生と静岡英和（インタビュー）	聞き手 伊勢田奈緒	33
2012年度のチャペルとキリスト教行事の報告		35
2011年度教職員研修会におけるレジュメ	東京神学大学学長 近藤 勝彦	36
執筆要綱		37
編集後記		38

創刊にあたって

学長 武藤元昭

この度、『静岡英和学院大学 キリスト教年報』が創刊されることになった。キリスト教信仰を土台とする本学にとっては、洵に結構なことである。むしろ、今までこの手のものがなかったのが不思議なくらいである。

幸い、伊勢田宗教主任を初め、本学には熱心なクリスチャン教員が何人も在籍している。この小規模な大学にとっては、大いに感謝すべきことであると思う。それらの教員が、大学・短大の枠を越えて、各々の専門分野とキリスト教との関わりに就いて共同研究を行い、その成果を一書に纏めたのが本年報である。

今回は、とりあえず3名の教員の研究が掲載されているが、それぞれに労作となっていることは、各論文の内容から窺える。本学にとって甚だ頼もしいことである。

昨今のキリスト教大学にとっての大きな悩みは、クリスチャン教員の減少である。建学の精神の土台にキリスト教信仰を置きながら、その精神を具現化すべき信仰の実践となるとかなり心許ない例が多い。学内宣教とまでは行かなくても、教員が建学の精神を理解してキリスト教関係の行事に関心を持ってくれば、宗教活動ももっと盛り上がるのだろうが、それも思うに任せないのが現状である。学生に於いても同様である。

そうした中で、宗教主任を中心にクリスチャン教員が精一杯の奉仕をして下さっていることには、心から感謝している。各々が本務を精力的にこなしつつ、今回の成果を挙げられたことは、本学としても誇らなければならない。確かに、毎週の礼拝に於いて、どれだけの学生が神と向かい合っているかとなると、あまり芳しい数字は出てこない。しかし、旧約聖書に、ソドムとゴモラが神に滅ぼされそうになった時の、神に対するアブラハムの執り成しの場面がある。ソドムの町に50人の正しい者がいれば許してやるという神の言葉に対して、アブラハムはその数を値切って行き、10人まで下げて神に赦しを請う。結局は正しい者がいなかった為にソドムは滅ぼされてしまうわけであるが、そのことは我々の大学の現状にも該当するのではないか。10人と言わず1人でも礼拝を楽しみにしている学生がいるなら、我々はそれを心の拠り所として礼拝を守っていけばよいわけである。

そのような状況の中で論集が編まれたのは、甚だ時宜を得たことと言えよう。次号は更に多くの執筆者が与えられることを心から願う次第である。

バッハの音楽を巡る旅 —演奏とお話—

菊池 みち子

ヨハン・セバスティアン・バッハの生きた時代（1685～1750）は、現代のように録音という技術もましてやコンパクトディスクなどもなく、音楽を聴くためには実際に会場に足を運ばなければならなかった。バッハは若い時代に旅をすることで様々なスタイルの音楽に出合っている。彼がそこから多くを学び、融合することにより独自のスタイルを生み出し、その結果どのような作品ができたのかを、いくつかの作品を聴きながらたどってみたい。

1) アイゼナハ時代（1685～1750）

バッハ一族

バッハは中部ドイツ・チューリンゲン地方では有名な音楽家一族の家庭に生まれた。チューリンゲンはドイツのほぼ中央に位置する地帯で、バッハ一族はこの一帯に散らばって音楽を生業として住んでいた。

当時の音楽家の仕事とは、宮廷音楽家、教会オルガニスト、カントル（教会音楽家）、または町楽士など多岐に亘っていた。音楽家もこの時代は一種の職人であり、音楽という技能も世襲されるべきものだったから、一家に男子が生まれれば当然のように音楽家となるべく教育されていったものようだ。J.S. バッハは8人兄弟の末子だが、父も兄も音楽家で、彼が音楽の道へと進むのも自然の成り行きだった。

* オルガン演奏

プレリュード変奏長調

ヨハン・クリストフ・バッハ
(1642～1703)

バッハの叔父で、バッハが生まれた時、アイゼナハの教会でオルガニストをしていた

ので、幼年期のバッハに音楽上の影響を与えていた人物といえる。後年バッハが記した家系記録には「深遠な作曲家」という注釈があり、バッハ家の先代として最も偉大な存在だった。

2) オールドルフ時代（1695～1700）

中部～南部ドイツの音楽の伝統

バッハには「月明かりの下での写譜」というエピソードがある。9歳までに両親を失った彼は、オールドルフに住む長兄に引き取られ鍵盤楽器の手ほどきを受けたと伝えられる。この兄、ヨハン・クリストフはパッヘルベルの弟子で、魅力的な楽譜をたくさん持っていたが、それらの楽譜を全部見せてくれる訳ではなかった。見ることを禁じられた楽譜を、皆が寝静まった頃、月明かりを頼りに全部書き写してしまうほど、バッハは並外れて勉強熱心な子供だった。この作業で、バッハは当時住んでいた、中部から南部にかけての音楽の伝統を汲み取ったことになる。

3) リューネブルク時代（1700～02）

バッハ15歳の年、外国の音楽に触れる機会がやってくる。兄に子供ができ、家が狭くバッハの居場所はない。リューネブルクでは聖歌隊員を募集しており、成績優秀だが経済的に恵まれていないバッハは、聖ミハエル教会の付属寄宿学校へ留学する。

チューリンゲン地方から北へ300キロメートル余りのリューネブルクは、同じドイツ語圏とはいえフランス文化の影響もあり、洗練された町並みに文化的な雰囲気が漂い、チューリンゲンから来たバッハにとって、まるで外国という感じではなかったかと思われる。

北ドイツ楽派の音楽との出会い

聖ヨハネ教会のオルガニスト、G.ベーム(1661~1733)は北ドイツ楽派の一人だが、中では最もフランス音楽からの影響を受けている。バッハが彼に師事したという記録はないが、バッハのコラール書法に影響を与えたとされ、オルガンのためのコラールパルティータ(変奏曲)などが挙げられる。

コラール

宗教改革を行ったルターによって始められたコラールは、当時の一般の人々でも歌えるようにと作られたドイツ語による単旋律の讃美歌である。聖書から歌詞が作られ、メロディーはルター自身の作曲によるもの、当時の流行歌の転用、グレゴリオ聖歌の編曲などにより、その後も様々なコラールが作られていった。それらはルター派の礼拝で会衆により歌われ

るだけでなく、コラールを用いた合唱曲や、オルガン作品などが多数編曲された。バッハも晩年に至るまで、コラールを作曲の柱として数々の傑作を生み出している。

更に、リューネブルクから北50キロメートルにあるハンブルクへもバッハは複数回訪れ、J.P.スヴェーリンク(1591~1652)の弟子であるJ.A.ラインケン(1623~1722)を訪ねている。アムステルダムで活躍していたスヴェーリンクは、北ドイツ楽派の父と呼ばれ、イギリスのヴァージナル音楽に由来する形式、ファンタジア、トッカータなどのスタイルを弟子達を通じて北ドイツに伝えている。バッハによるラインケンの作品の編曲を聴いてみよう。ラインケンのテーマがバッハではより自然な動きに編曲され、説得力のあるフーガへと展開されている。

* フーガ(ラインケンの主題による)変ロ長調 BWV954

『バッハの鍵盤音楽』D.シューレンバーグ著より転載 a)ラインケン b)バッハのテーマ

オペラ、フランス音楽との出会い

ハンブルクの鷺鳥市場ではオペラが演じられ、南80キロのツェレの宮廷ではヴェルサイユ直輸入のフランス音楽が演奏されていたので、そこからバッハは影響を受けたと思われる。

17世紀のフランスは「ルイ14世の偉大な世紀」と呼ばれ、ヨーロッパ随一の勢力を誇っていた時代で、ヴェルサイユ宮殿では華やかで威厳があり、あるいはエスプリに富んだ音楽が、王の儀式がかった日常生活の折節や、舞踏会、礼拝の場で鳴り響き、王の威光を盛

り上げるのに一役買っていた。ツェレの領主はこのようなフランスの生活を持ち込んでいたので、バッハはドイツのツェレでフランスの文化、特に音楽に触れることができた。

フランス音楽の一例として、フランス風序曲を取り上げたい。

J.B.リュリ(1632~87)はヴェルサイユ宮殿で活躍し、フランス様式のオペラを確立したが、オペラは幕が上がる前にまず序曲が演奏され、王が入場する。この序曲は付点音符の独特のリズムを持つ、王の入場にふさわし

い荘厳な音楽で、フランス風序曲と呼ばれる。この序曲のスタイルは瞬く間にヨーロッパ中に広がり、バッハはもちろんのこと、多くの音楽家を取り入れている。バッハの後年の作品、フランス宮廷のダンス音楽を連ねた管弦楽組曲の冒頭に、また、教会カンタータ61番では王の入場の音楽をベースに、キリストの降臨を待つコラールがまず歌われる。

それらの作品を続けて聴いてみたい。

- * リュリ
オペラ「アルミード」より 序曲
- * バッハ
管弦楽組曲第3番 BWV1068より 序曲
- * バッハ
カンタータ61番 BWV61
「いざ来ませ、異邦人の救い主よ」第1曲

『いざ来ませ、異邦人の救い主よ』 BWV61

Nun komm, der Heiden Heiland

Kantate zum 1. Advent 1714

Johann Sebastian Bach
1685-1750

1. Ouverture

Violino I, II
Viola I
Viola II
Soprano
Alto
Tenore
Basso
Continuo

Nun komm, der Heiden Heiland
Come Thou

der of Hei - den the Hei - land, Sa - viour,

Vl. I, II
Vla. I
Vla. II
S.
A.
T.
B.
C.

4) アルンシュタット時代 (1703~7) リューベックへの徒歩旅行

18歳でアルンシュタットのオルガニストになったバッハは、1705年、4週間の休暇を得て北ドイツのリューベックへ向かう。北ドイツ楽派最高の巨匠、D. ブクステフーデ(1637~1707)の音楽を直接聞くためである。彼の音楽のもつ半音階や不協和音の多用、大胆な転調、巧みなペダル奏法はバッハを圧倒したに違いない。バッハはリューベックに許可された休暇の4倍も超過し滞在する。

アルンシュタットへ戻ったバッハは、早速礼拝でその成果を試してみることに。久しぶりに帰ってきた彼の演奏を聴いた会衆は、コラールの詩節の間に長い即興が入り、予想に反した転調などにうろたえた、という。聖職会議はバッハに対し、まず、無断で休暇を延長したことへのおしかりとともに、コラールに変な伴奏をつけないこと、びっくりするような転調をしないこと、と釘を刺している。単純な伴奏のコラールと同名のバッハのコラール編曲BWV715の楽譜を見ながら、「予想に反する転調」をお聴きいただきたい。

* オルガン演奏

讃美歌第 I 編68番「父なるみ神に」

Allein Gott in der Höh' sei Ehr!
Nikolaus Decius, 1525

Allein Gott
Geistliche Lieder, printed by Valentin Schumann,
Leipzig, 1539

ち ち な る み か み に み さ か え あ
よ ろ ず を つ く り て と き わ に す
れ か し う え な き み い つ と ま た な き み
べ ま す
め ぐ み か し こ み た た え よ アー ン

「いと高きところには神にのみ栄光あれ」BWV715

バッハのオルガン曲の代表のように演奏される「トッカータとフーガニ短調」も、ブクステフデの影響といわれている。

* 『トッカータとフーガニ短調』BWV 565
より『トッカータ』

5) ヴァイマル時代 (1708~17)

イタリア音楽との出会い

ー協奏曲様式とアダージョー

バッハはミュールハウゼンを経てヴァイマルの宮廷オルガニスト兼宮廷楽士となったが、ここは彼の音楽形成にとっての重要な時期でもある。もはや仕事を放り出してまで音楽研修の旅に出られなくなったバッハに、領主の甥、ヨハン・エルンスト公子がイタリアの音楽をもたらす。当時はイタリア人がドイツ各地の宮廷に奉職していたから、バッハはイタリア音楽の軽快なリズムや明るい響きに触れる機会もあったようであるが、公子の持ち帰った、当時出版されたばかりのA.ヴィヴァルディ (1678?1741) の楽譜はバッハを刺激し、音楽の表現に大きな影響を与える。

* ヴィヴァルディ『調和の靈感』より

協奏曲第8番1楽章 協奏曲様式

協奏曲第11番2楽章 アダージョ

アダージョはヴァイオリンの奏でる切なく甘いメロディーで、リズムが勝るバッハの音楽に深みと豊かに歌うメロディーをもたらした。マタイ受難曲に、「憐れみたまえ、神よ」という有名なアリアがある。ペテロがイエスのことを、鶏が鳴く前に3度「知らない」と拒否し、後悔と涙に暮れる場面の後に、ヴァイオリンとアルトの声が絡み合いながら切なく歌われるこのアリアは、ヴィヴァルディのアダージョとの出会いなしには考えられない。また、特徴的な伴奏の和音は涙を表現しているといわれる。

* 『マタイ受難曲』BWV244より 「憐れみたまえ、神よ」(楽譜1)

* 『トッカータ、アダージョとフーガ』ハ長調 BWV564 (楽譜2)

BWV564のトッカータは北ドイツとイタリアの協奏曲様式の組み合わせ、アダージョは甘く叙情に満ちたヴェネツィア風のメロディー、フーガは明るくヴィヴァルディ風にと、バッハがこれまでに学んだ様々な音楽の様式が溶け合い独自のスタイルとなっているのが見て取れる。バッハの凄さは、学んだスタイルをそのいずれにも留まらず、自身の中で融合し高めていることである。しかも当時の新しい潮流だったフランスやイタリアの音楽を、ドイツを一度も出ることなくものにしていくのである。

最後にバッハ初期の頃の作品をお聴きいただき、私の講演を終わりたい。

*オルガン演奏

コラルパルティータ『おお神よ、汝慈しみにみてる神よ』BWV767

「バッハの音楽を巡る旅」は2012年9月8日の静岡英和学院大学主催の公開講座で講演、演奏したものを加筆し掲載した。使用したオルガンはマルク・ガルニエ社製のポジティブオルガンのため、オルガン演奏の際、曲の一部を手鍵盤用に編曲し演奏した。

尚、*印に曲名のみ記しているのはCDによる演奏。

楽譜 1 マタイ受難曲 BWV244より「憐れみたまえ、神よ」

Violino solo

Violino I

Violino II^{ca}

Viola

Alto

Continuo

Organo

f

p sempre

p sempre

p sempre

pizzicato

Org.

4 tr

7

pp

pp

pp

Er - bar - - me dich

p

10

er - bar - me dich, mein Gott, um mei - ner Zäh - ren wil - len; er -

4 4 5 8 6 2 6 5 7 6 6 6 #

13

bar - me dich, er - bar - me dich, mein Gott, er - bar - me, er -

7 7 9 8 4 5 8 4 3

16

bar - me dich um mei - ner Zäh - ren, um mei - ner Zäh - ren wil - len,

7 6 6 4 6 2 6 5 7 6 5 6 # 6 4 2

楽譜2 『トッカータ、アダージョとフーガ』ハ長調 BWV564より トッカータ前半部分

MANUAL
8.
PEDAL

トッカータ後半部分 (イタリア風協奏曲様式)

ルターの宗教改革を支えた音楽の働きについての一考察

伊勢田 奈 緒

はじめに

ルターの宗教改革運動の中から生まれた自国語による新しい賛美歌は、16世紀に至るまでグレゴリオ聖歌と呼ばれるミサでの歌がラテン語で聖職者たちによってのみ歌われていたことを考慮すると、その果たした働きは限りなく大きいことが想像できよう。1517年以来、マルティン・ルターの宗教改革運動は神学と信仰生活の両面の改革を目指していた。神学における具体的な改革目標は、第一に、カトリック教会の考え方に対して、第二に福音に基づいて新しい礼拝やミサの執行に対して、第三にカールシュタットなどの急進派に対して、新しい真の教会改革の必要性を説いていくことであった。他方、信仰生活面における改革の目指すものは、神から人々へ直接に語られると共に、人々が直接、神へ語りかけることができる、言わば、「我と汝」の生きた御言葉のやりとりによって、各人が主体的に信仰を告白できるようになることだった。言い換えると、ルターは、御言葉を通して一人一人が、イエス・キリストのみがその十字架を通して各人の罪を贖いそして救ってくださるといふことを感じ取れることを目指していた。しかし、そこには言葉の問題——教会用語であるラテン語や、文盲であること等——が障壁となっていた。そこで、ルターは聖書主義を掲げつつ、聖書を自国語に翻訳し、各人が聖書を読み理解できることを目指すと共に、万人祭司主義の下、さまざまな表現媒体ができる音楽に注目し、自国語による賛美歌集を作り、礼拝において全会衆が賛美できることを意図した。さらに彼は、賛美歌が教会の中のみならず、教会の外——学校、家庭、社会生活の場等——においても広く歌われることに努めた。これまで、ルターと賛美歌に

についての研究の多くは、音楽学の音楽史の立場やキリスト教神学の礼拝学の立場から研究されてきたが、ここでは歴史神学の観点から、ルターの宗教改革を支えた音楽の働きについての考察をしたい。

1. 16世紀ドイツにおける音楽事情について

先ず、教会の音楽について見てみよう。ミサの中で会衆が最後に歌う賛美歌はラテン語による「サンクトゥス（聖なるかな）」のみであった。当時、教会音楽は芸術的には発展を遂げていたが、ラテン語を知らない一般民衆は礼拝中、沈黙を守らざるを得なかった。すなわち、教会での音楽は専門家の仕事として発展し、他方、一般信徒は音楽の参加や典礼の理解は不必要とされていたのである。しかし、いつの時代でも民衆音楽は存在しており、故に、教会の礼拝以外の場で、信徒たち自身の信仰的な歌や聖歌が生まれた。後にルターはこの民衆音楽に注目し、採り入れることになる。民衆の音楽としては、ドイツでは、12世紀中頃から15世紀にかけて、ミンネゼンガーと称される騎士歌人たちが貴族社会に伝統的な騎士道精神や宮廷の愛について盛り込んだ歌詞を歌って活動していた。時代が下るにつれて恋愛ばかり採りあげていたミンネゼンガーの歌の内容は変容し、社会風刺などが盛り込まれるようになった。中世貴族の没落に伴って彼らは都市に住み着き、15、16世紀になると、各種の定職を持ちながら、自作自演の詩を歌い歩くマイスタージンガーに取って代わり活動するようになった。商工業のギルド出身者が多いマイスタージンガーの活動は、自由市民の間に生まれた文学・音楽活動であった。彼ら¹の音楽活動は公的な場では

¹ 彼らは親方（マイスター）の下に、詩人（ディ

なく、市場や街頭で歌ったり、また日曜日の教会の礼拝の後、集会を開いて、個人的な信仰表現の歌を歌って競いあったりしていた。

2. ルターの音楽への思い

ルター自身は、リュートの演奏ができ作曲をし、音楽に対して深い関心と理解を持ち合わせていた。彼は音楽との関わりは長く、5歳の時、入学しているマンスフェルトのラテン語学校でラテン語の読み書き、文法の他に、聖歌も習い始めた。15歳の時、入学したアイゼナハの聖ゲオルク教区学校では、教会や街道で歌う合唱隊に入って活動していた。彼はエルフルト大学においては基礎課程として音楽を学び、また彼がアウグスティヌス隠修士会の修道士となってからは「私はまず最初のミサで歌った²」と回顧しているように、祈り、詩編を歌い、ミサを守り、また労働、断食など神に仕える修道院生活の中で、音楽に触れる生活を続けていた。このように、彼は幼少以来、音楽に囲まれて生活していたと言えよう。さらにヴィッテンベルクにおいて、ルターは大学教授として神学の教育研究に携わると共に、ヴィッテンベルクの聖マリア教会と城教会の牧師の職を務めていたので、フリードリヒ賢公が城教会に招いた歌手や音楽演奏家たち³とも交流を深めたことが想像できる。ルターは宮廷音楽師のヨハネス・ヴァルター (Johann Walter, 1497~1570) への手紙の中で、「神学者になっていなかったら、私は音楽家になったにちがいない」と述べており、また盛期ルネサンス時代の代表的な作曲家ジョスカン・デ・プレ⁴ (Josquin Des Prez 1440?~1521) について「他の音楽家たちは音に支配されているのに対し、ジョスカンのみは音を意のままに支配する⁵」と

ヒター)、歌手 (ジンガー)、学友 (シュールフロイント)、徒弟 (シューラー) といった序列を作っていた。

² Luther's Works vol. 54, p.234

³ Carl Schalk, Luther on Music, St. Louis, Mo., 1988. p.24

⁴ Josquin Des Prez; Josquin des Prés, Josquin des Pres, Josquin Desprezとも綴る。

⁵ Walter E. Buszin, Luther on Music, ed., Johannes Riedel, Pamphlet Series No.3,

彼の作品を音楽の範として深く賛辞を献げているように音楽に造詣が深かったが覗える。そしてルターが音楽に対して次のように評価している。彼は『卓上語録』の中で、「音楽は最大のもの、真に神の贈り物で、それゆえサタンに嫌われるものである。なぜなら、音楽により多くの、大いなる試誘は撃退されるからである。音楽が奏せられるところには、悪魔は現れない。」と述べ、音楽は不安な人には最大の慰めであると指摘している。その人がたとえほんの少ししか歌えないとしても。」等と記しているように、音楽が神学と同様に人の心を慰めたり、元気づけるものとして高く評価していた。ルターにとって、言語と音楽との矛盾はなく、「話すこと」と「歌うこと」は、罪贖われた者の喜びから生じる表現として理解していたと考えられる。つまり、彼は、音楽は神の賜物であり、生きとし生けるものはみな音楽を与えられ、人間は一人一人への神のメッセージを、神の賜物である音楽にのせて歌う特権が許されていて、そのことによって福音は生きたものとして、人の心を動かすものであると理解していたのである。彼にとって信仰生活における音楽は神学に次ぐ高い地位を占めていた。言い換えれば、音楽は礼拝を美化するためのものではなく、福音と共にあるものと考えていたのである。彼は、すべての信仰者が祭司であると強調するからこそ、全てのキリスト者が共に神を誉め称え賛美し、そして共に宣言する (告白する) ことが大事だと考えていたのである。

3. 賛美歌創作へ至るまでの背景ときっかけ

ルターが賛美歌を創作した直接のきっかけは、ヴィッテンベルクにおける騒擾だったと言えよう。それは、宗教改革運動の勃発との関連から生まれたものだった。

教皇レオ十世は1521年にルターを破門し、またカトリック国のスペインから新たに神聖ローマ帝国皇帝に迎えられたカール五世は、1521年4月末、ヴォルムス国会に召喚して、ルターに対して自説の取り消しを命じたが、彼は聖書の権威による以外、あくまで自説を

St. Paul, 1958, p.13

変えないことを公言し「われここに立つ。……神よ、助けたまえ」と祈った。そしてその帰途、ルターは身の危険を心配した友人たちによってヴァルトブルク城内に保護され、約一年間（1521年5月4日～1522年3月1日）そこに滞在する間に新約聖書のドイツ語訳に着手した。他方、ルター不在の間、ヴィッテンベルクでは大騒動が起っていた。ルターに同調した者たちがルターの教説に基づいて、具体的な改革を急激に行い始めた。実際、ルターは『95箇条の提題』を掲げ、免罪符への攻撃を行ったが、ただし、一般の人々の生活に対して具体的に策を講じたわけではなかった。ヴァルトブルク城に身を隠していたルターは何もできず、ヴィッテンベルクでの諸改革を実行していた指導者、カールシュタット（Andreas Rudolph Bodenstein von Karlstadt, 1486～1541）とメランヒトン（Philipp Melancthon, 1497～1560）、そしてアウグスティヌス隠修会士のガブリエル＝ツヴィリンク（Gabriel Zwilling, 1487～1558）を支持するしかなかった。しかし、1521年末、カールシュタットらが福音主義の立場から司祭の生活やヴィッテンベルクの教会の礼拝を、改革の必要を信徒たちに理解させることをしないうまま、目に見える形で極端に変えようとしたことを知り、ルターはショックを受けた。彼らは改革の第一歩として、司祭や修道士の結婚が認められた。ルターは確かに、結婚は神が制定したものであり、司祭が結婚することは神の意にかなうことだと主張していたが、実際に神学的検討が不十分なまま、カールシュタットが司祭兼修道士の立場で結婚したことは彼には居たたまれないことであつたであろう。また、ツヴィリンクが激烈な調子で修道院を攻撃したために、修道士たちが修道院を去り始めた。

ルター不在の下、カールシュタットによる急激な改革は、人々を混乱させ、暴動化させた。カールシュタットは、13世紀以後、ミサにおいてパンのみによって行われていた聖餐に対し、パンとぶどう酒を受ける二種陪餐の執行や、司祭は礼服を着ないで平服で礼拝を執りおこなうことや、礼拝でのドイツ語によ

る説教など思いきった改革を実施しようとする。また、彼は神学委員会の議長となり、実際に同年12月25日にヴィッテンベルク城教会において、改革されたミサを執行した。ヴィッテンベルクの市会は、彼の指導の下で発布した「市条令」により、翌1522年1月24日より物乞いが禁止され、修道院の財産は教会の維持と貧民の救済にあてられ、宗教改革で最初の共同基金協定が制定された。この頃、さらに困ったことに熱狂的な預言者たちがツヴィカウからヴィッテンベルクにやって来た。ザクセンのツヴィカウではラディカルな福音主義運動が展開されていて、この運動の信奉者は指導者ニコラウス・シュトルヒ一派の聖書解釈が聖書の文字よりも、聖霊を重視するところより、ツヴィカウの預言者と呼ばれていた。1521年にツヴィカウで福音主義運動が当局に弾圧され、その三人の指導者ニコラウス・シュトルヒ、トマス・ドレックセル、マルクス・シュトブナーがヴィッテンベルクに逃れてきた。彼らは神よりの直接的啓示を告げ、聖書を必要とみなさないこと、そして自分たちの無教養と素朴にこそ、かえって神は自己を啓示されると説き、人々を惹きつけた。さらに、彼らは、この熱狂的な信仰によって、自分たちを支持しない他の人々を虐殺して神の王国を建設することを説く始末であった。この一連のツヴィカウからの熱狂主義者たちの事件と相まって、1522年1月25日にはカールシュタットの意図に応じて大学の学生たちを中心とする過激なグループによる聖画像の破壊事件が起こり、またカールシュタットはその理論的基礎付けになった『偶像の撤去について』を公にするなど、ヴィッテンベルクはますます混乱を極めた。こうした事態に困惑したザクセン選帝侯フリードリヒ賢公は、カールシュタットに急激な改革を中止するように指示すると同時に彼に説教をすることを禁じた。カールシュタットは賢公の命令に同意し、ツヴィリンクもヴィッテンベルクを去って行った。一方、ヴィッテンベルク市当局はこの大混乱をどう解決するべきか困窮し、ルターにヴィッテンベルクに戻ってくるよう要請した。帝国追放刑に処せられたルターが

ヴィッテンベルクに戻ることは危険であったが、彼は、同年3月に帰還し、熱狂主義者と聖画像破壊とに反対し、忍耐と愛について1週間の連続説教を行い、先ずは混乱の中にあった民衆の精神的な平穏を取り戻そうと努めた。ヴィッテンベルクの町が再び落ち着いてきた上で、彼は新しい福音主義教会建設という困難な使命に着手することにした。それが礼拝改革であり、その中で生まれたのが賛美歌の自国語による会衆歌唱の発想であった。

4. 礼拝改革の中の賛美歌

急激な改革が招いたヴィッテンベルクの騒動を目の当たりに体験したルターは礼拝の改革について慎重に行っていた。彼は先ず、ラテン語のまままでそれまで行われていた礼拝の改革を行った上で、次の段階でドイツ語の礼拝を実践していった。特に説教に重点をおき、毎回の礼拝には必ず説教が含まれるようにし、同時にさまざまな改革を丁寧に行いつつ、1526年に『ドイツ・ミサ』と呼ばれる礼拝改革の手引きを完成するに至った。ルターの改革の中心にあるものは、イエス・キリストの十字架の救いを宣べ伝える神の御言葉であり、彼は福音を中心として各人の罪の認識と神による罪の赦しを終始はっきりするような形で、礼拝の改革を成し遂げようとしたのである。

礼拝の改革の中で、新しく導入されたのがドイツ語の賛美歌、「コラール」と呼ばれる会衆賛美歌であった。彼は1523年の『会衆の礼拝式について』において、三つの大きな乱用——すなわち第一は教会の中には朗読と歌唱だけがあって神の言葉が黙していること、第二は神の言が黙することで、聖者物語や歌や説教の中に多くの非キリスト教的な寓話が入り込んでいること、第三に信仰のない教会のために、献金をしていること——が礼拝に入っていることを指摘している⁶。またルターは中世の教会が人間中心であり、神に犠牲を献げるミサであったのに対して、神中心で御言葉による神から罪人に働きかける恵みの働

きである礼拝を強調している。彼は主として1523年秋から1524年夏にかけてコラール創作に精力的に心血を注いだ⁷と考えられる。全賛美歌の中、三分の二以上がこの期間に創られ、大小四種類の重要なドイツ・コラール集が出版されているのである。礼拝改革と同様、賛美歌による改革も漸次的であり、1523年のヴィッテンベルクのための『ミサと聖餐の原則』では、あらゆる伝統的祭服と儀式が保持されたまま、すべてはラテン語で唱えられ歌われ、またキリエ、グロリア、昇階唱は聖歌隊によって歌われた。つまり、ルターはこの時点では、全会衆による歌の賛美の機会を設けていなかったのである。続いて1524年に、ヴァルターとルターの共編によるヴィッテンベルクの『小賛美歌集』が出版された。これには38の賛美歌に、25の四、五声部に編曲した曲が収録されている。この四、五声部のコラールは聖歌隊用のもので、コラールのメロディーはソプラノのパートではなく、テノールに置かれた。二年後に、ヴィッテンベルクにおいて、歌詞に単声メロディーのついた曲と、礼拝での聖歌隊用の多声の曲から成り、また、異なった歌詞に同じメロディーを当てるという場合もあるという先例をつくった、ヴァルターの『コラール聖歌集』が単行本として出された。これが真の意味での『ドイツ会衆賛美歌集』の最初のものである。ルターがヴィッテンベルクに戻り約3年を経て、遂に1525年10月29日、ヴィッテンベルクの教区内教会で、新しい内容による礼拝が行われた。これまで一般の信徒にはほとんど理解されなかった従来のラテン語による礼拝形式とは違って、ドイツ語による礼拝がまさに行われたのである。この礼拝での音楽はルターの指示を受けたヴァルターが担当した。新しい礼拝形式は当時の人々に歓迎され、その年のクリスマスから正式に教会で用いられるようになり、翌1526年にルターの序文を伴う『ドイツ・ミサ』が発行された。『ミサと聖餐の原則』は、ラテン語が使われている学校や大学向けであったのに対して、1526年の『ドイツ・ミサ』は、各個教会、特に農村部での諸教会に向けられ

⁶ 「会衆の礼拝式について」青山四郎訳『ルター著作集』第一集第五巻、1967、275頁

⁷ Luther's Works Vol.53, p.193

たもの、すなわち、学問を受けていない一般信徒たちのためのものであったので、祈りも歌詞もドイツ語が使用された。たとえば、クレド（信条）の代わりに「Wir glauben all an einen Gott（我ら皆、一なる神を信ず）」を会衆が歌うといったように、ミサのラテン語の通常文の代わりに全会衆によるドイツ語の賛美歌が採り入れられた。ルターは古くからの、会衆全員が参加できるキリスト教の礼拝の原点に立ち返ることを模索し、そこで、たどり着いたのが、礼拝における全会衆による賛美であった。故に礼拝の中で民衆が歌うべき賛美歌の必要が急務であった。彼は先ず、自作〔1523年末の「深いところから私はあなたを呼ぶ」など〕の賛美歌を示し、ドイツ語の歌詞とドイツ語のメロディーの提供を広く呼びかけた⁸。その内いくつかのものは、中世以来ラテン語で歌われていた教会賛歌などをルターが自らドイツ語に翻訳し、古くから使われてきたメロディーを、自分あるいは他

の音楽家たちの編曲で使っていった。

以上のように、賛美歌と礼拝改革は一体のものであり、『ドイツ・ミサ』⁹はプロテスタント教会最初の自国語による礼拝式として重要であり、その対をなすものが、グレゴリオ聖歌と共にドイツ・コラールであったと言える。

5. ルターの賛美歌の特徴

賛美歌の父である聖アンブロシウスに対して、ルターは「プロテスタント教会の聖アンブロシウス」と称される。彼の賛美歌は宗教改革の歌として有名な『神はわがやぐら』のように、率直で力強く信仰を高らかに歌いあげているのが特徴的である。1524年に編集され、ヴィッテンベルクとエアフルトで印刷されたプロテスタント最初の賛美歌集『八歌集』は、ルターによるものが4曲、パウル・シュペラトゥス¹⁰によるもの3曲、ユストウス・ヨナーヌ¹¹による1曲が収められていて、

⁸ 「私はまたグラジュアルについて、またサンクトゥス デイについて、会衆がミサの間に歌いうる、できるだけ多くの自国語の歌がほしい。今ではただ聖歌隊が歌うか、あるいは、聖別の時に司教に応答するかだけである、これらの《歌》は以前にはすべての会衆によって歌われていたことをだれが疑うだろうか。このような歌は、ミサ全部が自国語になるまでは、ラテン語の歌の直後に、あるいは一日おきに、自国語の歌がうたわれるよう、司教によって整われるべきである。しかし、私たちは詩人に欠けており、神の教会でいつも用いられるだけの価値がある敬虔な霊の歌（パウロが言っているような）を私たちのために作ることで人々が知られていない。しばらくの間、聖餐のあとで、『神をほめたたえ、神に感謝せよ、ご自身をわれらに与えたまいし神を』を歌ってもよい。しかしその中の一部分、『そして聖なる sacrament は、私たちの死に際して、聖別され司祭の手から』は、その全生涯において sacrament をあまり高く評価せず、死に際しては信仰なしに、善き業によって生命にはいることを望んだ聖バーバラの崇拜者によって追加されたものであるゆえに除く。また音楽の拍子と性質の双方とも、それが余分なものであることを証明しているからである。このほかに『今われら聖霊に祈らん』と、『愛らしき幼子』が有益であろう。大きな霊の味わいをもった歌は多くないからである。もしもだれかドイツ人の詩人がいるならば、彼らは刺激されて、私たちのために信仰の詩を備えてくれるであろうと、私は思う。』『ルター著作集』第一集第五巻、1967年、聖文舎、299頁

⁹ ドイツ・ミサの順序

- ①コラール（詩編34篇2～23節をグレゴリオ聖歌の第1旋法で歌う）
- ②キリエ（従来の9回ではなく、3回になった。）
- ③集祷（牧師は聖壇に向く）
- ④使徒諸の朗読（グレゴリオ聖歌の第8旋法で歌う）
- ⑤コラール（聖歌隊の合唱）
- ⑥福音書の朗読（グレゴリオ聖歌第5旋法で歌う）
- ⑦信条のコラール
- ⑧説教
- ⑨主の祈り
- ⑩聖餐の勧め
- ⑪聖別・配餐（この間、コラール（従来の昇階唱の代わりにルター自作の「我ら聖霊を求めてのりまつる」というコラールを用いた。また聖餐式ではボヘミア賛美歌のドイツ語訳『聖なるかな』『神の子羊』が用いられた。）
- ⑫祝祷

¹⁰ Speratus, Paulus (1484-1551) プロイセンの宗教改革者で賛美歌作家である。1514年ザルツブルクに始まって各地を紙墨していたが、ヴェルツブルクで1520年頃、結婚したため放逐され、22年に破門宣告を受け23年にヴィッテンベルクに逃れ、そこでルターの賛美歌制作を助け（1524年）、その後、ルターの推挙によりケーニヒスベルクへ移って非だしプロテスタントのルター主義宗教改革に尽力した。

¹¹ Jonas, Justus (1493-1555) ドイツの宗教改革者。ルターの同労者。エアフルトで教会法の教授であったが、1521年にヴォルムス国会に出席す

単旋律の賛美歌が収められているパンフレットのような賛美歌集である。続いて、1524年夏、前述したように聖歌隊や音楽の教養をもつ人々のために、ルターの友人で音楽上の協力者であったヨハン・ヴァルターがルターの序文付きの多声コラール曲集である『小賛美歌集』を出版した。これは38曲のドイツコラールのうち、24曲がルターによるものである。

ルターによる賛美歌は全部で37篇あり、伝統的の典礼用賛美歌のドイツ語訳や翻案、詩編や典礼用聖句をパラフレーズにしたもの、詩編や典礼用聖句などにとらわれない自由な創作賛美歌、そして信仰問答の歌の四グループに分類することが出来る。

ルターは勿論、組織神学者であるが、また優れた教会音楽家であり、教会音楽の中世から近代への先導者とも言えよう。彼は「今日、私はドイツ語のミサを持とうとし、それに携わっている。しかし私が欲するのはそれが正しいドイツ語となるようにということ。歌詞と楽譜の両者、拍と節また抑揚は母国の正しい言葉と声から来るものでなくてはならない。そうしなければ、全ては猿真似のようなものだ。」¹²と語っているように、聖書主義に基づいて御言葉を重視し、その御言葉を人々に伝えるために音楽が最も重要な方法であると確信していた。また、「神の御言葉について、音楽は高くたたえられるべきである。聖霊ご自身も音楽をそのなすべき働きの方法としてたたえ、ご自身の聖書において音楽を通して聖霊の賜物が預言者たちに植え付けられるのである。……このようにして、長老たち、預言者たちが神の御言葉に深く結びつけられるのは音楽以外にはないとごく自然に理解していたのである。」¹³と述べているように、彼は

るためエアフルトでルターに初めて出会い、21年にヴィッテンベルクに急遷移り、以後、ヴィッテンベルク大学の教会法教授、また修道院学寮副院長として神学研究を極め、ルターの密接な協力者として改革運動に尽力した。また、初期ルター派の賛美歌と典礼の発展にも重要な役割を果たした。

¹² Luther, Martin, Weimarer, Ausgabe, 50, s.370.

¹³ Luther, Martin, 'Preface to Georg Rhau's Symphoniae iucundae, 1538' in Luther's Works, vol.53, pp.321-324.

万人祭司という考え方をもって、日頃から関心を持っていた民衆音楽を礼拝に結びつけ、コラールが生まれたと考えられる。ルターは、聖書本文を構成要素の単位として、聖書を基礎とした音楽を作り上げた。それらは容易に歌うことができるようなものであり、また、時代を超えて歌い継がれることが重要であった。ルターの旋律の特色は『神はわがやぐら』のように階段を上下するような力動感にあふれもので、9音階の範囲の中で、音節の設定がなされ、反復を繰り返す音楽的な構成をとっている。親しみやすい曲を生み出す彼の音楽の才能によって、この賛美歌の改革を効果的に展開することができたことは疑いがない。ルターの特筆すべきは非典礼的な、あるいは非宗教的な音楽を、典礼的な音楽に生まれ変わらせたことであり、そして礼拝において母国語による賛美歌によって信仰共同体を作りあげたことである。

ルターがコラールを作る際、聖書翻訳の時と同様、歌詞が誰にでもわかること、メロディーが親しみやすいことに殊に注意した。また、それまで歌われていた聖歌の中から、良い曲をドイツ語に翻訳することも行った。故に、ルターは新作を作ることよりもできるだけ古くから歌い継がれ、聞き親しんでいる歌詞やメロディーを土台として、それを一般会衆に覚え易く、馴染み易いように改作することに努めた。彼はローマ・カトリック教会のそれまでの全てを否定して新しい曲を作ったというのではなく、歌詞によく合うように、グレゴリオ聖歌のメロディーを工夫してつなぎ合わせた。また、彼の良いものは良いとして区別しないという臨機応変さから、古くからドイツに歌い継がれてきた多くの民謡や、当時の世俗の歌の中からも、良いメロディーがあれば、採用して、それに宗教詩を付け加えたのである。彼のこうした取り組みは民衆に早く賛美歌を馴染ませ、覚えてもらうための効果的な工夫であったと考えられる。

6. カールシュタット、ツヴィングリ、カルヴァンの教会音楽への考え

既に述べてきたように、ルターは礼拝での

音楽使用を熱心に推進したが、しかし16世紀の宗教改革者の音楽への考え方はさまざまであった。彼に対抗したカールシュタットはヴィッテンベルクを追われた後、オーラミュンデの教会に移ったが、その地ではますます急進的な改革を行った。幼児洗礼を廃止し、聖画像と教会音楽を非難し、ミサにおけるキリストの現在を否定し、牧師に結婚を義務づけた。そもそも、ヴィッテンベルクにおいても彼は音楽を推奨しなかった。1524年にカールシュタットはトマス・ミュンツァー (Thomas Münzer, 1490~1525) に宛て、「私は人々が聖なる歌によって信仰が高められるということを感じない。むしろ、これを過度に行うなら、神聖なる事柄を抑止するものである。」¹⁴と評している。彼にとって、福音伝道のための音楽使用をするルターは、人間の内面を軽視し、外面的なものである音楽を過度に重視しているとみなしたのである。つまり、彼にとってルターは偶像崇拜を行っていると考えたのであろう。ルターと同時期のチューリッヒの宗教改革者ツヴィングリ (Huldreich Zwingli, 1484~1531) の音楽に対する姿勢は、公私を区別し、個人的には音楽を愛したが、公的には、彼が指導した宗教改革ではカトリック教会のミサや、聖像廃止を主張し、教会のオルガンを破壊して教会音楽や賛美歌促進のためにはみるべきものはないとした。彼は美術と音楽を宗教から追放し、ミサにおけるキリストの現在を否定し、宗教のためには剣の使用を肯定した。また宗教改革者の第二世代であるジュネーブのカルヴァン (Jean Calvin, 1509~1564) は中世カトリック教会の非聖書的要素をきびしく排除すると共に、礼拝についても新しい様式を示し、それにふさわしい賛美歌の様式を作り出した。彼の特徴は、礼拝において神を賛美する賛美歌としてふさわしいものは、今までに書かれてきた創作賛美歌ではなく「神の言」の賛美の記録、すなわち、旧約聖書の「詩編」であるとした。彼は「人間のレクリエーションや

楽しみのために適当ないろいろな事柄の中で、音楽はまず第一のものであり、音楽は神がそのために特に取りのけておかれた賜物であるという確信に、われらを導くものである」¹⁵としている。しかし、礼拝における音楽の使用について、音楽の美しさや楽しさに酔って神への賛美の要素が二の次になることを厳しく戒め、そのために教会内では合唱を禁じた。

カールシュタットやツヴィングリ、カルヴァンでなくとも、西方教会の初期神学者として著名なアウグスティヌスでさえも、音楽について善にも悪にも、聖にも俗にも、用いられる得ることを懸念していた¹⁶が、ルターはむしろ、音楽を生きるための滋養物の代わり、神の栄光と神の言葉に生命を伝えるための手段として積極的に推奨した点が同時代の宗教改革者たちやまた、それまでの神学者たちと異なっていたと考えられる。

7. ルターの音楽の協力者ヴァルターとラウ

礼拝改革に音楽を採用するという、神学と音楽の一体化という画期的なルターの企画の裏には、特に彼を助ける二人の有能なアドバイザー、ヨハン・ヴァルターとゲオルク・ラウの存在があった。まず、「プロテスタントの教会音楽の父」と見なされているヴァルターは1429年、イエナの近くチューリンゲンのカーラ (Kahla) に生まれ、1520年からザクセン選帝侯フリードリヒ賢公のザクセンの宮廷楽団にバスの歌手として、また若い作曲家として活躍した。前に述べたようにルターは、新しい賛美歌集のため、ドイツ語の歌詞とドイツ語のメロディーを提供する者を求めている。ヴァルターは宮廷楽団長コンラッド・ラプシュ (Conrad Rupsch, 1475~1530) の推薦の下、1524年、ルターと共に、ルターの序文付きの多声コラール曲集である『小賛美歌集』(既出)を出版した。翌年、ルターの賛同者となった彼は数ヶ月、ヴィッテンベルクに滞在した後、選帝侯の死去もあって、ル

¹⁴ Gunther Franz (ed.), Thomas Muntzer, Schriften und Briefe. Kritische Gesamtausgabe, Gutersloh, 1968, p.415

¹⁵ John Calvin, "Letter to the Reader" in The Form of Prayers and Songs of the Church 1542, trans. Ford Lewis Battles, Calvin Theological Journal, vol.15, No.2, 1980, p.163

¹⁶ Luther's Works, Vol.57, p.111

ターに強く請われて¹⁷ヴィッテンベルクに移り、ルターの『ドイツ・ミサ』の中の賛美歌の作曲を担当することになった。彼の尽力によって賛美歌集は1525年、1528年、1534年、1537年、1544年、1511年において発行された。特に彼は受難曲の独唱による福音書著者の朗唱に対して、ドイツ語による会衆の合唱を効果的に用いることに成功した。また、1526年から48年まで、当時170人以上の少年を擁していたトルガウのラテン語学校の合唱長となり、ルターと協力して創った賛美歌集を積極的に用いてプロテスタント教会音楽の普及に努めた。さらに1534年からはラテン語学校にて、ラテン語と神学の指導や、また、トルガウの市民グループのために歌と音楽指導も行い、プロテスタント教会の音楽によってトルガウの町全体を福音主義の町へ変えていったのである。ルターの死後、メランヒトンの勧めで、ザクセンの新選帝侯のドレーズデン宮廷楽長となったが、この間は、宗教的に、音楽的に、礼拝的に思い切った改革ができないことに彼自身、不甲斐なさを感じ、1554年に引退した。彼は「私はなぜ、神が天から私たちに音楽を与えたかを示したい。これには、それによって神を賛美すること、私たちを助け、導かせるためという二つの理由があって、それで私たちは天から神が与えた贈り物を使わなければならないのである。」¹⁸と述べているように、教会での音楽の役割は御言葉を解釈するよりも、御言葉を告白することであると理解していた。ヴェルターはルター派教会の最初の合唱長であり、キリスト教の信仰共同体において音楽を使用することへの神学的理解を十分もった音楽家で、ルターの良き音楽協力者であり、ルターの運動に大きく貢献したことは間違いない。

また、ゲオルク・ラウ (Georg Rhau, 1488～1548) もルターの音楽活動に欠かせない重要な人物である。1500年までにはドイツの60都市に印刷所があったと言われる。プロ

¹⁷ Verbra des alten Johann Walters in Michael Praetorius' Syntagma musicum 1, Wittenberg, 1614, p.499-53

¹⁸ Hohann Walter, Lub und Preis der Loeblichen Kunst Musica, 1538

テスタント教会の新しい歌は、小さいサイズから大きな新聞大のようなサイズまでの賛美歌集となって都市の印刷所から発行された。宗教改革運動の中心都市、ヴィッテンベルクは特に福音主義教会の音楽普及のために重要な働きをしたが、ヴィッテンベルクの音楽出版活動は主としてゲオルク・ラウによるものであった。彼はフランケン地方のアイスフェルトに生まれ、1508年にエルフルト大学へ入り、1512年からはヴィッテンベルク大学で学んだ。1514年に卒業して、翌年から叔父の経営していたラウーゲーテンベルクという印刷所で働いており、1518年から20年ライプチヒの聖トーマス教会付属の音楽学校の合唱長となり、また、ライプチヒ大学では音楽理論を教えた。彼がライプチヒにいた頃、ちょうど、ゲオルク髭公の手配で、ルターとエック、カールシュタットとメランヒトンがライプチヒで会し¹⁹、宗教改革の転換点ともなったライプチヒ討論が行われた。この時、ラウは初めて宗教改革運動に直面したのだった。その後、ルターの信奉者となったラウはライプチヒからを去り、1520年から1522年までアイスレーベンとヒルドブルクハウゼンの学校で校長として務めた。1523年にヴィッテンベルクに戻り、印刷業と出版業を営み、ルターの著作やルター派教会の音楽作品を発行した。彼の功績は、『音楽便覧』をはじめ、音楽の手引き書のシリーズ本（イースターやクリスマスのための音楽の紹介、学校に通っている子供のためのドイツ語賛美歌の紹介、ルターの音楽に関する考え方の要約等）を編纂し、賛美歌の普及に大いに努めたことである。また彼はルターの音楽上の相談相手の一人であり、さらに町教会のオルガニストを務め1541年からヴィッテンベルク市会議のメンバーとして活躍したことでラウはルターを公私共に支え

¹⁹ ここで、ルターは公会議も誤りうること、コンスタンツ公会議が異端としたフスの教えの中にも福音的なものが含まれることを発言した。討論の後、ルターは城内で説教したが、市民には宗教改革に賛同する動きがあったものの、ゲオルク髭公は以後、ルターに反対の立場をとり続け、説教も禁止し、ドイツ語新約聖書を初めルター著作を一切禁止した。

続けた。

8. ルターの宗教改革での音楽採用の評価

ここで改めてルターが宗教改革に音楽を採用はしたことは成功か、否かを考えてみよう。初めに見てきたように、ヴィッテンベルクの騒動により漸次的改革を行っていったルターであるが、その中で生まれた賛美歌は確かに、宗教改革の輪に一般民衆を取り込む効果があった。ルターの賛美歌の採用は、教会内外の隅々にまで福音主義を伝播させるのに有効的であり、その点においては成功だったと言えるだろう。既に述べてきたように、他の宗教改革者たちが「御言葉に比べれば音楽には何ら力がない、むしろ排除すべきだ」と考えていたのに対して、ルターは、メロディーは言葉に命を吹き込むものだと考え、常に賛美歌やまた精神を高める歌を歌うことは礼拝以外にも見いだされるべきだと考えていた。このような彼の考え方が、宗教改革の運動を浸透させていくのに効果的だったことは疑いない。たとえば、ヴィッテンベルクから70キロも離れたマグデブルクの市の1524年5月6日付の『年代記』に「市場で貧しい老人がルターの賛美歌を歌っていた」という報告²⁰があるように、教会以外、学校や、家庭で、また市場や居酒屋でも自国語であるドイツ語の賛美歌が歌われていった。ペテグリー氏によれば、多くの賛美歌集は残存していないが、16世紀、ルターの賛美歌集は2000版以上印刷されたであろうとしている²¹ことより、かなりの需要があったと考えられる。

上記のように福音主義伝播に有益だったと考えられる賛美歌について、教会内と教会外という視点から、詳細に分析してみよう。まず、ルターの二つの賛美歌『新しい歌 (Ein Lied von den zwei Märtyrern Christi, zu Brüssel von den Sophisten von Löwen verbrannt, geschehen im Jahr 1523)』と

『神はわがやぐら (Deus noster refugium et vitus)』のそれぞれの作曲目的を比較しつつ、検討していくことにする。『新しい歌』は、神聖ローマ帝国皇帝の直接支配下にあるネーデルラントではヴォルムス勅令以降、ルターの教説は異端とされていたが、ルターの教説を支持し棄てることを断ったために、1523年7月1日にブリュッセルで処刑された、プロテスタントで最初の殉教者である二人の若いアウグスティヌス隠修士²²のことを知ったルターが、「……神の御言葉のために彼らは血を流し、この世を旅立った。彼らは神の勇敢で敬虔な息子のようであった。忠実でライオンの心を持ち、彼らは殉教者の冠を勝ち得た……」とその死を勝利として誉め称えたものであった。また、二人が火刑に処せられる姿に対して、たとえば「……その若者たちは陽気にアーメンと唱え、躊躇も示さなかった……」と表現するなど、彼の高揚した感情が賛美歌の12連の詩に生き生きと表れていて、彼らの殉教の死によってルター自身、力が与えられたことが分かる。この賛美歌は今までにない種類の詩であり、明らかに典礼のために創られたものではないと言える。当時は、さまざまな話題はパンフレットとして印刷され、広く売られていたが、現実的に民衆は文盲が多く、歌が一番の情報手段であった。すなわち、マイスタージンガーが流行歌を創って、市場で、道で、酒場で歌うことで情報は伝播していた。二人の殉教の死を採りあげている『新しい歌』は、まさにマイスタージンガーが歌う流行歌のような役割を果たしたと言える。また、ルターはこの歌にこめた自分の思いを迅速かつ、広範囲に伝わることを目指したと考えられる。他方、『神はわがやぐら』は、常に教会内の典礼で使用されることを目的としていたと考えられる。詩編46編を元にして、それを自国語に訳し、プロテスタントの性格が強く、かつ格調高い表現の礼拝での賛美歌に作り替えている。特に、三番の歌

²⁰ Gustav Herted (ed.), Die Chroniken des niedersächsen Städte: Magdeburg, Leipzig, 1899, vol.2, p.143

²¹ Pettegree, Andrew, Reformation and the Culture of Persuasion, Cambridge U.P., 2005, p.46

²² 1523年、若いアウグスティヌス修道士、ヘンドリック・フォエスとヤン・ヴァン・エッセンがルターの改革思想を支持したことでプロテスタントの最初の殉教者としてブリュッセルで火刑に処せられた。ルターはこれを詩にした。

詞²³は、ルター自身を含む宗教改革運動に関わるすべての人々への応援メッセージとなっているように思われる。以上のようにルターは賛美歌の曲を、教会内、教会外という二方向性を意識して創ったと考えられる。

教会内の担い手については、ルターが道を開いた新しい賛美歌は、ニコラウス・デツイウス (Nikolaus Decius, 1485～1546)、ゼーハルト・ハイデン (Sebald Heyden, 1499～1561)、ユストウス・ヨナス (Justus Jonas, 1493～1555) などの聖職者および、教会音楽の関係者たちによって、教会音楽として多くの曲が作り出されていった。また、教会では礼拝の中で、会衆が歌う前にオルガンのコラール前奏曲が弾かれ、気分を盛り上げてから聖歌隊がコラールに基づくカンタータを歌い、最後に会衆が立ち上がってコラールを歌うようになった。特筆すべきは、ルターの改革初期の聖歌隊は、それまでの、専門の音楽家で組織され、職業化されていたのと異なっていたことである。ルターはすべてのキリスト者が神の言葉を賛美できることを理想とし、まず、信徒がみずから聖書を読まなければならないと考えていた。しかし、実際には、字の読めない者が多かったことを考慮して、彼は青少年を教育しようと考え、各教会に学校を付設させた。カリキュラムでは音楽が高い位置を占めていて、ほとんど毎日、音楽の時間が設けられ、その教材は賛美歌であった。児童、生徒のうち歌唱に優れた者を選んで、それに成人の信徒の有志を加えて、必要に応じて練習し、かなり複雑な合唱曲を歌わせた。それがルター時代の聖歌隊であった。教会にあって、賛美歌は全会衆が一つになって礼拝を支え合う役目を果たしたと言える。他方、教会の外での賛美歌の担い手たち——平信徒のプロテスタントの歌の担い手たち——については、たとえば、靴屋の親方であったマイスタージンガーのハンス・ザックス

(Hans Sachs, 1494～1576) は、生涯に4,374篇のマイスター歌、約2,000の祝詞歌 (Spruch)、120以上の悲喜劇、85本の謝肉祭劇、7篇の散文対話を残したと言われる。作品の主題は、ルター訳聖書の一節、古い教会制度への風刺、時事的な出来事の記録、道徳的な教訓を盛り込んだ寓話など、多岐に及んでいた。彼はルターの思想に深く傾倒し、1523年7月8日、『ヴィッテンベルクの鶯 (Die Wittenbergisch Nachtigall)』の詩を発表してルターへの共鳴と新時代の到来を歌い上げた。1524年、ザックスは『司教座参事会員と靴屋の対話』、『聖職者の見せかけの善行と誓願について』、『強欲など社会の悪徳に関する対話』、『福音派キリスト教徒とルター派教徒の対話』と一連の作品を発表して教権批判を続けた。既述のように1524年のプロテスタント最初の賛美歌集『八歌集』やその一年後のルターとヨハン・ヴァルターによる『小賛美歌集』はエルフルトやニュルンベルクやヴィッテンベルクなどの印刷業者によって印刷され流布した。また、多くのルター派の賛美歌集の創作活動は、実にルター自身も40近くの賛美歌を作ったように、聖職者ばかりでなく、平信徒にまで及んだ。最も顕著な平信徒の詩人としては先に述べたマイスタージンガーであるハンス・ザックスや、ザックスの同僚であるニュルンベルクの市職員であるラザルス・スピングラー (Lazarus Spengler, 1479～1534) がいた。また、女性の賛美歌創作者も出たが、中でもシュトラスブルクのカタリーナ・ツェル (Katharina Zell, 1497～1562) は1534年、ボヘミア改革者たちの賛美歌をチェコ語からドイツ語に訳した賛美歌集を4冊、シュトラスブルクの印刷屋から出した。また、マイスタージンガーと共に、巡回伝道者たちが、商人に変奏してルターの小冊子と共にルターの賛美歌を歌い回ってその普及に努めた。教会の外でのプロテスタントの歌は教会で歌われる歌と共に、聖職者、教会音楽の専門家、平信徒 (賛美歌作者、出版業者、マイスタージンガー、学校の生徒、教師、職人、農民、商人など) 等の働きにより、隅々にまで伝播することができ

²³ 「悪魔が世に満ちて、私たちが飲み込もうとするときも、私たちは恐れなくてもいいのです。私たちは敵に勝利します。この世を支配するサタン、悪魔がたけり狂って襲ってくるときも、彼の手は私たちに届きません。彼は神の御言葉の一撃で、打ち倒されてしまいます。」

たのである。総じてドイツ語で歌えるようになったルター派の賛美歌は教会内外において、人々の間に深く浸透していったのであり、福音は非常に迅速、かつ、有効に伝播していったことは疑いのないことである。

9. 最後に

ルターでさえも、初めは礼拝改革の一環として音楽を採用したかもしれないが、これまでに見てきたように、人々が歌うドイツ語の歌はルターの宗教改革運動の普及を大いに助け、成功であったことは間違いない。口から口への歌によるルターの賛美歌伝道は、説教運動の一環であり、礼拝改革の一環であったと位置づけられよう。民衆に福音を伝え、理解させたい一方、その改革は、慎重に行わなければならないルターにとっては、音楽の活用は重要な働きをしたと言える。そればかりか、ドイツ語を用いた新しい賛美歌によって、ルター自身もそうであるが、人々は非常に慰められ、励まされ、元気づけられたことであろう。そしてルターが着手した音楽採用は、教会における礼拝改革を助け、また学校で、社会で、家庭で、民衆にキリスト教精神やキリスト教倫理感を自然に身につけるのに大きな働きをしたことは疑いのないことである。『ドイツミサと礼拝の順序』において、ルターは礼拝のために「人は聖書を読誦し、歌い、説教し、執筆し、詩作しなければならないし、そのために助けとなり、利益となるならば、私はその上にすべての鐘を鳴らし、すべてのオルガンを奏し、鳴ることの出来るすべてのものを鳴らしたいものである。なぜなら、その点に関しては教皇派の礼拝はまったく呪うべきものであって、彼らは礼拝を律法と、わざと、功績とにしてしまい、それによって信仰を圧迫してきたからである。」²⁴ と記しているように、音楽を愛したルターは、会衆の歌う賛美歌を「会衆の説教」として大いに期待し、その期待は裏切ることなく、人々の心に宗教改革の信仰を深く浸透させることができた。ヴァルターを始め、ヴィッテンベ

ルクの宗教改革者たち、印刷業者や一般信徒の協力によって多くの賛美歌が生まれ歌い継がれていった。それに加えて、福音の真理を、人々が自分たちの口でドイツ語で口ずさむことができ、そのような歌を礼拝の時ばかりではなく、日毎夜毎、そして仕事をする時にも口ずさむことができたことなどを考え合わせる時、宗教改革の一連の運動の中に、プロテスタント（ルター）の賛美歌導入を積極的に実施したことは、高く評価すべきだと考える。ルターの賛美歌中、最後期のものの一つで1541年ヴィッテンベルクがトルコ軍の脅威に晒された時に作られた『主よ、御言葉もて』の「主よ、御言葉もて、御民を励まし、主にそむくものを打ち砕き給え……」という歌詞は、まさに、人々を福音のもとへ呼び寄せる、力強い「歌う説教」であり、福音主義伝播への彼の熱い思いがこめられているように思われる。

（尚、本稿は日本キリスト教会第60回学術大会（2012年9月12日）において発表したものを加筆・修正を加えたものである。）

《一次史料》

Jenny, Markus ed., Luther, Zwingli, Calvin in ihren Liedern, Zurich 1983
Luther's Works Vol.53 : Liturgy and Hymns, ed., Ulrich S. Leupold, Philadelphia
Luther, Martin, Dr.Martin Luther's Deutche geistliche Lieder, Leonard Woolsey Bacon ed., Charles Scribner's Sons, 1883
『ルター著作集』第一集第五巻、第六巻、聖文舎、1967年

《参考資料》

Andrew Pettegree, European in the Sixteenth Century, Blackwell. 2002
Andrew Pettegree, Reformation and the Culture of Persuasion, Cambridge U.P., 2005
Buszin Walter E., Luther on Music, ed., Johannes Riedel, Pamphlet Series No.3,

²⁴ ルター著作集第一集第六巻、聖文舎、1963年、421頁

- St. Paul, 1958
- Carl Schalk, *Music in Early Lutheranism*,
Saint Luis, 2001
- Carl Schalk, *Luther on Music*, St. Louis,
Mo., 1988
- Christopher Boyd Brown,, *Singing the
Gospel*, Harvard U.P., 2005
- Daniel Reuning, 'Luther and Music' in
Concordia Theological Quarterly, vol.48
no.1, pp.17-22, Corcordia, 1984
- Gunther Franz (ed.), *Thomas Müntzer,
Schriften und Briefe. Kritische
Gesamtausgab*r, Gutersloh, 1968
- Hohann Walter, *Lub und Preis der
Loeblichen Kunst Musica*, 1538
- Leo Schrade, 'The Editorial Practice of
George Rhaw', in *The Musical
Heritage of The Church*, vol.4, pp.34-
44. Concordia Pub. House. 1954
- Luther's Works*, Vol. 54, 57, ed., Ulrich
S. Leupold, Philadelphia
- Mark S. Soony, *Essays on Martin
Luther's Theologu of Music*, Blue
Maroon, 2006
- Rebecca Wagner Oettinger, *Music as
Propaganda in the German
Reformation*, Ashgate, 2001
- ヴァイタ『ルターの礼拝の神学』岸千年訳、
聖文舎、1969年
- エドワード・フォーリー『時代から時代へ』
竹内謙太郎訳、聖公会出版、2006年
- 原恵『賛美歌—その歴史と背景』日本キリス
ト教団出版局、1980年
- 皆川達夫『中世・ルネサンスの音楽』講談社、
2009年
- 横坂康彦『教会音楽史と賛美歌学』日本キリ
スト教団出版局、1993年

高齢者における讃美歌を歌う会の意味 —インタビューの分析より—

鈴木 幸子

問題と目的

讃美歌を歌う会は、本研究において「礼拝以外でクリスチャンが主体的に讃美歌を歌うことを目的とした集い」を指す。礼拝以外で讃美歌を歌うことについては、まず、讃美歌21^{注1)}の編集方針において、礼拝以外の諸集会や信徒の生活の中でも多様な展開ができる歌（小海，1998）が、生活の様々な場で、信仰を持って生きるための糧となると記された。また、かつてメソジストを率いたウェスレー兄弟が、讃美を信仰の本質と行動を備えたもの（山本，2010a）とするために、信仰を中心とした生活が主日だけでなく教会に集わない日にも、仲間同士で集まった場であっても（山本，2008）再現されるように求めたことから、礼拝以外で讃美歌を歌うことは重要であるといえる。

特に、高齢者が讃美歌を歌うことについては、施設や病院における讃美歌コンサートや讃美歌を歌うことでの交流を喜ぶ姿が施設等のホームページで伝えられている。また、海外の日系教会では、高齢者が母国語で讃美歌を歌うことで大きな慰めと喜びを（西村，2005）得ている。さらに、高齢者の音楽活動を含めた文化芸術型の余暇活動の参加割合は高く、健康的な生活に繋がることが明らかになっている（原田，2011）ことから、讃美

歌を歌うことは、高齢者の生活において良い影響を与えるもののひとつであると考えられる。しかし、高齢者自身が礼拝以外で讃美歌を歌うことをどのように意味づけているのかについての詳細な検討はされていない。

これまで、日本において礼拝以外で讃美歌を歌う活動に関する先行研究には、讃美歌イベントの課題による仮説的分類（棟方，1998）や多くの事例報告等がある。讃美歌イベントの分類では、イベント参加者の目的別に企画手法を解説している。事例報告では、特に1954年に出版された讃美歌^{注2)}（以下54年版讃美歌）から讃美歌21への移行期において、礼拝では讃美歌21を採用した後も、54年版讃美歌を歌う機会を設けている（小島，1998）ことや、ゴスペルソングを歌う現状をグローバル・ソングの視点から考察する（山本，2008）等、礼拝以外で讃美歌を歌う様々な集いが多く行われていることを認め、誰に対して何をどのように行ったか、感想や活動報告、今後の活動の方向性を検討しているものが多い。しかし、讃美歌を歌う会が主体的に行われているならば、参加者にとっての活動の意味について問う必要があるのではないだろうか。かつて、ジョン・ウェスレーに率いられたメソジストが、「土地」という絆から切り離されていたため、讃美することや会衆と共に歌うことで共同体の一致を実感した（山本，2010b）という、信仰と同時に彼らに特有の意味づけがあったことを考えると、讃美歌を歌う会の意味は参加者にとって重要か

注1) 1997年に日本基督教団讃美歌委員会により編集・出版された讃美歌集である。前身の1954年に出版された讃美歌から43年後の出版である。43年の間の社会的変化と共に讃美歌に求められるものが変化していることを受けて、①現代という変化する時代と状況の中で、信仰を共に証する歌 - 中略 - ⑧用語や歌詞、音楽の面でも、現代の会衆が理解できる歌、またその感性に応じる歌（小海 1998）等、8つの編集方針を基にしている。

注2) 1954年に日本基督教団讃美歌委員会により編集・出版された讃美歌集である。1903年に各教派に共通の歌集が編集された後、2回目の改訂版である。この43年後、讃美歌21が出版されている。

つ特有なものであると考える。

よって、本研究では、高齢者が主体的に行う讃美歌を歌う会の成立の要因や活動内容を考察することにより、高齢者における讃美歌を歌う会の意味に迫ることとする。

なお、考察の際には、ジョン・ウェスレーが「歌うメソジスト」と呼ばれた人々に伝道をするため、讃美歌を歌うことにこだわったその方法と要因のうち、次の4点に着目する。それは、4つの点が伝道という目的と同時に、会衆が声を合わせて歌うために重要であると思われる、この視点から考察することで、讃美歌を歌う会（会衆）の特有の意味が浮き彫りになると考えるからである。

第一に、「礼拝以外でも讃美歌を歌うことを重視した」点である。ジョン・ウェスレーに導かれた初期のメソジストといわれる人たちは、礼拝以外の会合でも、家庭でも、仕事場でも、お茶の時も歌った。それによって、日常的な場面と心情、体験を共有し、時間的・空間的空白を埋めることに成功した。さらに讃美歌は、聖日と聖日をつなぐ橋渡しとなって週日をつなぎ、共同体（意識）を形成していくこととなる（山本，2008）。ジョンは、人々を信仰に導く方法として、礼拝以外のあらゆる所で讃美歌を歌うようにしたのである。

第二に、人々が歌える讃美歌にするために「生活に身近な詩を用いた」点である。あらゆる所で「歌える讃美歌」の作詞に貢献したのは、ジョンの弟であるチャールズ・ウェスレーである。チャールズは、日常で感じたものを詩的に表現することに情熱を抱いて（馬淵，2004）おり、信仰を持って生きる日々の生活から、あらゆる瞬間に詩を起こした（山本，2010a）のである。身近な出来事を歌詞にして信仰に用いる方法をとったのである。

第三に、讃美歌に「慣れ親しんだ曲を採用した」点である。チャールズの歌に曲をつけたのは、ジョンである。ジョンは、チャールズに「世族の恋人を略奪する」と称されるほどに、当時の流行歌の旋律にチャールズの詩をのせた。流行歌という馴染みの音楽に福音がはっきりと歌われた（山本，2010a）ため、

人々の興味を引き、歌うことができたのである。

第四に、讃美歌へのこだわりには「個人的な体験が要因になっていた」点である。ジョンの讃美歌を歌うことへのこだわりは、ジョン自身に歌うことを契機とした信仰の体験があったためと思われる（山本，2010b）。ジョンは、ジョージア伝道に向かう船の中で、途中何度もひどい嵐に遭遇した。しかし、そのような嵐の中で、同船していた26名のモラヴィア信徒たちは、一心に讃美を歌っていたのである（山本，2010a）。ウェスレーは日記に、これは今まで私が見たこともなかった最も輝かしい日であった（高松，1985）と記すほど、深い感銘を受けた。また、ジョージア伝道に失敗した後のジョンにとって、詩編、そして讃美は神への応答と同時に、神の慰めとなり、同時に神へと近づく具体的な方法として、自身の体験に基づく実感あるものとなったと考えられる（山本，2010b）。ジョンには、讃美することの価値を高めるような個人的体験があったのである。

よって、本研究では、高齢者のインタビューで得られたデータをこの4つの視点から考察することで、高齢者における讃美歌を歌う会の意味を明らかにすることを目的とする。

方法

研究協力者：都内で活動している讃美歌を歌う会のリーダーA氏80代、長年参加しているメンバーB氏70代、奏楽者C氏70代の計3名。全員受洗しているクリスチャンである。協力者の名前と活動名（讃美歌を歌う会）は全て仮名である。

調査期間と内容：2012年8月に協力者3人に対しインタビューを行った。場所は隣席との仕切りがあるレストランである。協力者の3名に研究内容を明かし、了解をいただいた上でインタビューを開始した。主な質問項目は、讃美歌を歌う会の成立の経緯と活動内容である。質問を行った後は、協力者3名が自由に発言できるように、研究者の介入は最小限にとどめた。インタビュー時間は1時間20分程であった。インタビューはICレコーダー

で記録した。

分析方法：調査によって得られた3人の讃美歌を歌う会の成立や内容に対する意見や感想を逐語化した後、大谷（2008）によるSCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いて分析した。そのうち、讃美歌を歌う会成立と活動内容に関するものを考察対象とした。

SCAT分析は、4ステップ（<1>から<4>）のコーディングが基になる。具体的には、逐語化したものをセグメント化した後、まず<1>データの中の着目すべき語句を抽出、次に<2>それを言いかえるためのデータ外の語句、さらに<3>それを説明するための語句、そして<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコーディングを行い、それを基にストーリー・ラインを作成し、最後に理論記述を行った。

ストーリーラインについて、SCATでは「データに記述されている出来事に潜在する意味や意義を、主にステップ<4>に記述したテーマを紡ぎ合わせて書き表したもの」（大谷、2008）と定義される。ストーリーラインの意義は、ステップ<1>から<4>までのコーディングが、どちらかといえば、データの部分に着目して概念化する作業であって、いわばデータの「脱文脈化（decontextualization）」を行ったのに対して、ステップ<4>からストーリーラインを紡ぐ作業は、その「再文脈化（recontextualization）」の作業であるという点である。つまり、データの示す「表層の文脈」から出発した分析者はステップ<1>から<4>の作業によってデータの深層に迫ってゆき、ストーリーラインでそれを「深層の文脈」として記述するのである（大谷、2011）。

また、理論記述は、普遍的で一般的に通用する原理のようなものではなく「このデータから言えること」である（大谷、2011）。

結果

インタビューから得られた分析データを表1に示した。表中、研究協力者はA、B、C、インタビューアーはIと表記する。表記「…」

は聞き取り不能を表す。「ストーリーライン」と「理論記述」は、本稿においては考察に直接関わるため、本文中に記述する。

(1) 讃美歌を歌う会の概略

本調査対象の讃美歌を歌う会は、1996年4月から2012年4月までの16年間継続された、讃美歌を歌う活動である。活動は、1年に2～3回のペースで都内W教会を会場に開催された。参加者は、毎回20人程の高齢者で、W教会に所属しているメンバーに限らず、東京都内や都下、都外からも集った。活動内容は、参加者のリクエスト曲を生伴奏で歌い、リクエスト曲の選択理由や曲にまつわる話で構成され、2時間程行われる。讃美歌を歌う会成立のきっかけは、あるキリスト教の国際的集いにおいて、各国の歌をツールとした国際交流を行ったメンバーが童謡唱歌の会を発足、その後、メンバーの讃美歌だけを歌いたいとの希望により「讃美歌を歌う会」を発足した。

(2) ストーリーライン

SCAT分析のステップ<4>「テーマ・構成概念」から以下のストーリーラインを作成した。なお、文中の下線はステップ<4>「テーマ・構成概念」である。

ストーリーライン

・まず、讃美歌を歌う会の成立の要因には、大きく2つが考えられる。

第一に「リーダーの豊かな教会体験の再現欲求」である。

讃美歌を歌う会成立の要因には、豊かな教会体験をもつ重要なリーダーの存在がある。リーダーは、教会活動に熱心なクリスチャン一家で育った。リーダーは幼少期、教会帰りの青年たちの集う祖父母宅において、にぎやかに讃美歌を歌う雰囲気を味わっていた。また、男女別学で男女の話す機会がないような日本の風土の中で、教会は唯一の性差ない活動の場であった。リーダーは悪いことをしている感覚をもちながらも、男女混合合唱の特別な

活動から、教会での合唱の喜びを感じていた。この時、教会のメンバーからは、本当の信仰でなく讃美歌信者だと信仰態度への批判をされたこともあった。このリーダーの幼少期の教会体験や青年期の教会体験の回想がリーダーの讃美歌活動への原動力のひとつになっている。

第二の要因は「讃美歌21使用への抵抗」である。

讃美歌を歌う会成立のきっかけとなるメンバーたちの中には、当時礼拝で使用され始めていた讃美歌21使用への抵抗と同時に54年版讃美歌使用継続への賛同があった。

その理由として、まず54年版讃美歌は、名作といわれる優れた歌詞や優れたメロディー、それら歌詞とメロディーの適応的な関係が保たれている多数の高評価曲が収められているという。豊かな時代背景のもとで作られた一流作者による讃美歌が多く、作者への高評価もしている。また、明治時代のクリスチャンの貢献によって、讃美歌に基づいた日本語訳の歌が教科書掲載されていたことや、明治期から歌い継がれる讃美歌への興味などから、高齢者にとって馴染みの曲である。

讃美歌21への批判は、主に歌詞とメロディーの適応的な関係ではないと感じるということから生じている。その一方で、讃美歌21の歴史的理解をし、他者へ理解の促しをしている。

・次に、讃美歌を歌う会の魅力は下記の3つが挙げられる。

まず、リーダーの魅力である。参加するクリスチャンは様々な所属であり、ノンクリスチャンの参加も3割程あった。参加者たちはこの限定のない参加条件に、リーダーによる他者受容の価値を認めている。

次に、教会音楽の魅力である。ノンクリスチャンであっても、ミッションスクールでの経験や、讃美歌認知の高さから歌唱可能である。また、昔は普段の生活で歌うことがほとんどない中、教会が歌う場所としての音楽的役割を担っていたことが影響している。

最も魅力的なのは、責任ある伴奏役割を担う奏楽者の貢献により多数のリクエスト曲を

演奏付きで歌える面白さと、選択讃美歌についての語りで構成される充実の活動内容にある。特に、選択讃美歌についての語りは、個人の経験と讃美歌の関係を示しているため信仰生活の語りでもある。参加者は他者の信仰生活を深い共感・感動をもって知ることとなる。この点が、参加者が礼拝よりももっといい活動だと高評価する理由のひとつである。

讃美歌選択の理由の語りから、個人経験と讃美歌の関係に目を向けることで、年齢による選択曲の違いはあるが、心を捉える讃美歌の存在は共通であることに気づく。心を捉える讃美歌を自問することで、讃美歌による理屈のない信仰の原点があることを知る。讃美歌は、歌詞に信仰の理屈のない歌でも、慰め・喜びがあることから、感謝・慰め・平安の役割をもつ。よい讃美歌は、人生の苦しみの中での価値、心を捉えるものとしての価値があると、ゆるぎない評価をしている。

(3) (2)のストーリーラインを基に理論記述を行う

理論記述

- 1、讃美歌を歌う会成立の要因は、「リーダーの豊かな教会再現欲求」とメンバーの「讃美歌21使用への抵抗」の2つである。
- 2、リーダーには、幼少期・青年期の教会における豊かな讃美歌活動の個人的体験がある。
- 3、讃美歌21への抵抗は、高齢者にとっての優れた作品、優れた作者による作品と馴染みのある作品が多く収録されている54年版讃美歌を使い続けたいという意思の表れである。その一方で、讃美歌21への歴史的理解もある。
- 4、高齢者にとって歌詞とメロディーの適応的關係は、讃美歌21よりも54年版讃美歌の方が優れていると感じられる。
- 5、讃美歌を歌う会の魅力は、「リーダーの他者受容への価値づけ」と「教会音楽の魅力」、そして「活動内容」にある。
- 6、魅力的な活動内容の一つは、リクエスト

- 曲がすぐに伴奏つきで歌える面白さにある。
- 7、最も魅力的な活動内容は、「讃美歌選択の理由の語り」を他者と共有し、共感・感動をもって互いの信仰生活を確認することである。
 - 8、讃美歌選択の理由の語りは、礼拝よりももっとよいと高評価を受ける。
 - 9、讃美歌は、人の心を捉え、理屈のない信仰の原点になる。
 - 10、讃美歌は信仰の理屈のない歌でも、感謝・慰め・平安の役割、人生の苦しみの中の価値、心を捉えるものとしての価値がある。
 - 11、ノンクリスチャンの参加は、讃美歌認知の高さからの歌唱可能性、またミッションスクールでの讃美歌の経験、リーダーの他者受容により可能であった。

考察

本研究では、高齢者が讃美歌を歌うために主体的に集う「讃美歌を歌う会」の意味を明らかにするためにインタビューを行った。その結果をジョン・ウェスレーが用いた方法と要因の4つの視点から考察する。その際、各視点にふさわしいと思う理論記述を選択する。

第一は「礼拝以外でも讃美歌を歌うことを重視した」点と理論記述1、3、6、8である。高齢者の讃美歌を歌う会は、礼拝以外で主体的に集い讃美歌を歌っている。それは、初期のメソジストといわれる人たちが、礼拝以外の会合やあらゆる所で歌うことで、聖日と聖日をつなぐ橋渡しとしたこととは異なると考える。讃美歌を歌う会は、年に2、3回の開催のため、礼拝と礼拝の間の架け橋といった意味付けはないだろう。では、なぜ高齢者が礼拝以外で主体的に集い讃美歌を歌うのだろうか。それは理論記述1の讃美歌を歌う会成立の要因から考えられる。讃美歌を歌う会成立の要因は、「リーダーの豊かな教会再現欲求」と「讃美歌21使用への抵抗」である。リーダーは、讃美歌を礼拝以外で歌った豊かな記憶がある。幼少期の祖父宅に集い讃美歌を歌う青年たちの雰囲気を感じ、青年期においても男女混合合唱で讃美した経験である。

その礼拝以外での讃美歌の記憶を再現することを望んでいたと思われる。そのリーダーの再現欲求と、メンバーの54年版讃美歌を使い続けたいという意思（理論記述3）が一致した。讃美歌を歌う会成立の1998年当時讃美歌21は、出版されてから1年の間に礼拝の讃美歌に導入されはじめ、高齢者がこれまで親んできた54年版讃美歌を歌う機会が少なくなってきていた。そのため、讃美歌を歌う会が54年版讃美歌を歌うことを保証したのである。その際、リクエスト曲がすぐに伴奏つきで歌える面白さ（理論記述6）があり、これも礼拝では体験できないものである。また、理論記述8では「讃美歌選択の理由の語りは、礼拝よりももっとよい」と高評価されている。讃美歌選択の理由の語りは、高齢者がクリスチャンとして生きてきた信仰生活の語りでもある。個人の信仰生活の語りは、同じ時代を生きた高齢者同士の、身近で具体的な話として理解や共感や感動を覚え易い。このような語りは礼拝の中で取り上げられる機会は少なく、礼拝と違った理解や共感があると考えられる。

高齢者の讃美歌を歌う会は、礼拝にはない「リーダーの讃美歌の記憶の再現欲求」と「54年版讃美歌のみを歌うこと」、「リクエスト曲が伴奏つきで歌える面白さ」、「個人のこれまでの信仰生活を語り合い、理解や共感し合うこと」を保証する場としての意味がある。

第二は、チャールズ・ウェスレーが、人々が歌える讃美歌にするために「生活に身近な詩を用いた」点と理論記述9、10である。

讃美歌作詞家のチャールズ・ウェスレーは、人々があらゆる場面で歌えるように、生活に身近な詩を書いた。理論記述9「讃美歌は、人の心を捉え、理屈のない信仰の原点になる。」にかかわる分析データ（表1 54番）からは、90歳の女性の信仰の原点が讃美歌「神様は軒の小雀まで」であることが分かる。軒先に止まっている雀の子どもは小さな存在であるが、神様が見守っているという歌詞は、生活に身近な歌詞で具体的にイメージし易い。この身近で具体的な詩が、彼女の心を捉えたのであ

る。また、理論記述10は「讃美歌は信仰の理屈のない歌でも、感謝・慰め・平安の役割、人生の苦しみの中での価値、心を捉えるものとしての価値がある。」である。馬淵（2004）は、チャールズが必ずしも讃美歌として用いられることを想定しておらず、「神」や「主」などキリスト教用語が使用されていたとしても、福音的と言えない詩や、讃美歌との境界上にあるような詩もあるという。信仰をもって生きる生活において書いた詩であるが、言葉として表現されない場合がある。讃美歌を歌う人がよと感じる歌は、信仰の理屈が言葉で表現されていないなくても、生活に身近な詩であっても、感謝・慰め・平安等、人の心を捉えるものであると考えられる。

第三に、ジョン・ウェスレーが、人々が歌える讃美歌にするために「慣れ親しんだ曲を採用した」点と理論記述3、4である。

ジョンは、当時の流行歌の旋律にチャールズの詩をのせた。人々は、馴染み深い流行歌に福音がはっきりと歌われた（山本，2010a）ため、興味を引かれ、共に歌うことができたのである。理論記述4では、「高齢者にとって歌詞とメロディーの適応的關係は、讃美歌21よりも54年版讃美歌の方が優れている」と感じるようだ。なぜ、そう感じるのだろうか。馴染みのある旋律が関係しているのだろうか。54年版讃美歌が出版された頃は、インタビュー協力者のリーダーは30代前半、もう二人はリーダーより若かった。その頃日本は、縦書きだった歌詞が横書きになり、旧仮名づかいから新仮名づかいに変わり、相前後して聖書も口語訳になるという、戦後のキリスト教ブームの余韻が残っていた時代、世の中すべてが新しくなるという時代の改訂のため、新しい讃美歌（54年版）といってもあまり奇異ではない（山内，1998）。おそらくそれほど抵抗なくみんなが歌い始めた（山内，1998）。新たなものを受け入れる時代の流れの中で、54年版讃美歌が新たな優れたものとして感じられたのではないだろうか。また、高齢者の学校教育時代、音楽の教科書には、讃美歌のメロディーが日本人の文化と融合した形で採用されてい

たことはよく知られている。ジョンが馴染みの旋律を用いたことで人々の興味を引いたように、教育の中で馴染みをもったメロディーが54年版讃美歌への移行の抵抗を少なくしたのではないだろうか。一方、讃美歌21への移行は、歌詞とメロディーが高齢者にとって適応的には感じられていないことから難しいようだ。讃美歌21の編集方針の一つに、用語や歌詞、音楽の面でも、現代の会衆が理解できる歌、またその感性に応じる歌（小海，1998）を採用すると同時に、高齢者に馴染みのある、受け継がれてきた讃美歌を生かしている。しかし、高齢者にとっては若い世代が馴染むような新奇な旋律が目立つのかもしれない。また、54年版讃美歌の作者や作品の理解について発言（表1 32～34番等）があったが、讃美歌21についての作品や作者理解の発言はなく、54年版讃美歌の方が讃美歌21よりも深く理解されている可能性がある。しかし、歴史的な視点で讃美歌21の存在を肯定する発言がある（表1 40番）。讃美歌21を歌うことには抵抗があるが、讃美歌が新しくなったことには理解を示している。讃美歌21に対する高齢者の想いは表裏一体の可能性もある。以上第二、第三の歌詞やメロディーについては、宗教改革者のカルヴァンも「旋律というものは水を注ぐじょうごのようなものだ」、「言葉や概念というものが適切なメロディーを伴うと、人の心にすっと入る」（山内，1998）というように、高齢者にとっても重要な意味がある。

第四に、讃美歌へのこだわりにはジョン・ウェスレーの「個人的な体験が要因になっていた」点と理論記述2、5、7である。

ジョン・ウェスレーと同様に、讃美歌の会のリーダーにも豊かな讃美歌活動の個人的体験（理論記述2）がある。理論記述5「活動の魅力は、リーダーの他者受容が他者によって価値付け、教会音楽の魅力、そして活動内容である」についても、リーダーの個人的経験に由来すると思われる。リーダーの幼少期に青年たちがにぎやかに讃美歌を歌った個人的経験が多くの人を受け入れる姿勢の土台と

なり、教会の音楽に魅了された経験から、讃美歌が他者をも惹きつけるものと考え、その経験が豊かだからこそ自ら讃美歌と信仰を語り、他者の語りを聞くことに繋がっていると考える。このリーダーが語った幼少期、青年期の経験を基に80年以上積み重ねられた経験もあるだろう。その積み重なった個人的経験により、讃美歌を歌う会の参加者が何を共有するとよいのか、そのためにはどうすればよいのかをはっきり活動内容に盛り込ませたと考える。

また、リーダーの個人的体験には教会の中で、讃美歌信者と批判されたこともあった(表1 14番)。しかし、「讃美歌クリスチャン」といって、神学的な原理から批判だけして能事足れりとするのは、間違っていないか(山内, 1998)という意見がある。リーダーの個人的な讃美歌体験が、讃美歌を歌う会を16年間率いた力として大きな意味があると考えられる。

さらに、活動を魅力的にしていたのは、讃美歌選択の理由の語りにある個人的な信仰生活の経験を互いに確認し合う(理論記述7)ことである。ジョン・ウェスレーが伝道のために個人的な経験を要因として讃美歌を用いたのに対して、高齢者はこれまで生きてきた個人的な信仰生活を互いに確認し、語った他者を改めて理解するという意味がある。

最後に、4つの視点に当てはまらないものに、理論記述11がある。ノンクリスチャンの参加にかかわる事項である。ノンクリスチャンは、讃美歌認知の高さから歌唱可能であり、またミッションスクールでの経験から、讃美歌に親しんできた人々もいる。山内(1998)によれば、信仰は無前提ではありえず、必ず先行する体験があるという。讃美歌体験が「先行の恵み」の体験になるという根本理解に立つ大切さを述べている。高齢者の讃美歌を歌う会がきっかけでクリスチャンになったという話は聞かないが、讃美歌を歌う会がノンクリスチャンに対して「先行の恵みの体験」としての意味があると示唆される。

まとめ

以上の考察から、高齢者における讃美歌を歌う会の意味は次のようにまとめられる。

- ① 讃美歌を歌う会は、礼拝と礼拝の間の架け橋役割よりも、リーダーの讃美歌の記憶の再現欲求と54年版讃美歌のみを歌うこと、リクエスト曲が伴奏つきで歌える面白さ、個人のこれまでの信仰生活を語り合い、理解や共感し合うことを保証する場としての意味がある。
- ② 高齢者にとって信仰の理屈のない讃美歌は、チャールズの詩に信仰の理屈のない詩があるように、理屈なき感謝・慰め・平安や信仰の原点としての意味がある。
- ③ 讃美歌を歌う会で高齢者が54年版讃美歌を歌うのは、讃美歌21が歴史的理解をしながらも、馴染まない歌詞やメロディーが目立って歌い難いことに対して、54年版讃美歌が、高齢者にとって歌詞に適切なメロディーを伴った状態で、心にすっと入るからである。
- ④ リーダーの個人的経験は、讃美歌を歌う会で何を共有することがよいのか、そのためにはどうすればよいのかを明確にすることに作用し、活動内容を充実させたという、大きな意味がある。
- ⑤ 讃美歌選択の理由の語りは、高齢者がこれまで生きてきた信仰生活を確認するためであり、それを通して他者を改めて理解するための道具として意味がある。
- ⑥ ノンクリスチャンと共に讃美歌を歌うことは、ノンクリスチャンの讃美歌体験が、「先行の恵み」としての体験になる可能性を含んでいる。

これらの意味は、研究協力者らの讃美歌を歌う会の特有の意味であり、一般化できない。しかし、高齢者の讃美歌の変化に対する捉え方や信仰生活の共有、重要な役割を担うリーダーの存在が、高齢者の讃美歌活動を支えるひとつの可能性を示唆している。今後は、本研究で検討しなかった60代や90代の高齢者や、信仰生活歴の違いに焦点を当てて、その意味づけと差異を検討していくことで、高齢者における讃美歌活動の意味をより理解できると考える。

引用文献

- 原田隆ら (2011). 高齢者の生活習慣に関する調査(2)ー余暇活動と生きがい感についてー 名古屋文理大学紀要, 11, 27-69.
- 小島一郎 (1998). 使っています『讃美歌21』ーあんなこと、こんなことありますー 礼拝と音楽, 97, 11.
- 小海基 (1998). もう一度確認しよう『讃美歌21』 八つの編集方針 礼拝と音楽, 97, 35.
- 馬淵彰 (2004). チャールズ・ウェスレーー 福音と出遭った詩人, 福音主義神学, 35, 1-23.
- 棟方信彦 (1998). みんなで楽しく賛美の集いをーイベント・プランニングの実際ー 礼拝と音楽, 97, 40-45
- M・シュミット (1985). ジョン・ウェスレー 伝 回心への内的発展 高松義数 (訳), 新教出版社.
- 西村篤 (2005). 高齢社会における教会の社会的役割ー日系人教会の試みを通してー 基督教研究, 67, 1, 52.
- 大谷尚 (2008). 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案ー着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続きー 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54, 2, 27-44.
- 大谷尚 (2011). SCAT: Steps for Coding and Theorizationー明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法ー, 感性工学, 10, 3, 155-160.
- 山本美紀 (2008). 「現代に生きるメソジストと音楽ーグローバル・ソング Global Songとグローバル・ヒムノディ Global Hymnody の視点から」 ウェスレー・メソジスト研究, 8, 67-80.
- 山本 美紀 (2010a). 群れを導く歌ー初期メソジストにおける讃美歌の意味 阪大音楽学報, 8, 163-178.
- 山本美紀 (2010b). 会衆歌と公共性ーウェスレーの宗教体験と初期メソジストの讃美歌を巡ってー 環太平洋大学研究紀要, 3,

79-90.

山内一郎 (1998) 「混迷の時代に希望の響きをー『讃美歌21』刊行一年に思う」 礼拝と音楽, 97, 36-39.

表1 SCAT分析

番号	発言者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
1	B	讃美歌を歌う会には重誼の会から話した方がいいと思うんだけどね。資料を用意したんですけど、Aさんがキリスト、勤労者としての表彰されたときのAさんの経歴を工生さんが書いてくれた資料なんですよ。後でびっくりしたんですけど、僕が、簡単に紹介するつもりで、Aさんの生い立ちとかの経歴とか、大学YMCAの活動とか、都市YMCAで活動したとか、これ詳しく読んでほしい。	讃美歌を歌う会、成り立ち、重誼の会、Aさんの活動から始まった会	讃美歌の会の始まり、前身に重誼の会の存在、リーダーの過去の活動	会成立の経緯、リーダーの存在	重要なリーダーの存在
2	B	それで、僕もあの、1回目欠席になってるんだけど、私はこの讃美歌を歌う会のプロフィールを過去から見てみましたが、それ以外の人が、どの讃美歌を歌いたのかをリストアップして、それを伴奏まで歌ってあげたい。20人ぐらいの歌って後にその歌についての思い出を語ることです。ずっとやってきたわけわ、はじめのうらちまでAさんがうらやうっていろいろ書いておられて、ということで、やってきて、私はね、あの会はものすごくいい会だと思ってる。その、私も日曜の集会に出ますけれどね、礼拝よりもっといい感じの。	希望の讃美歌、ピアノリストの伴奏、讃美歌選択の理由、語りの記録、高評価	希望の讃美歌、ピアノリストの伴奏、讃美歌選択の理由、語りの記録、高評価	活動内容の充実、礼拝との比較	礼拝よりもっといい
3	A	まずね、私は、生まれたのはクリスチャンホームに降ったのですが、母の実家が市川だったから、父は仕事いろいろ忙しいから、けれども母の実家のおいちゃんおばあちゃんも忙い人でも理窟でしたから、そこがたいがい音楽一家庭です。で、家じゅう全部クリスチャンだった。で、私のいいさんは石井十次っていう人がいるんですよ。あれがキリスト教だっかっていて、讃美歌とか、牧師の話を聞くとか、礼拝をやるよ、ああいうことをするのがあるんですけど、讃美歌とか、牧師の話を聞くとか、田舎の村長さんの家によく行くんですけど、それがエイセイ会という法人として立ち上げて、それをそこやとてやりますよ。家のこと言いますと、子どもが多かったんですけど、私の母は女で4番目。しかし、一番目から4番目までの女の子しか、2番目の女の子がなくて、クリスチャンだっかってる。で、私の母は4番目です。妹も弟もその下に8人くらいいました。それが、全部が教会でいて、うらやかとって、教会の、母の家は教会のたまりみだいなもので、教会の帰りみんな若い人来て、にぎやかに歌を歌った。で、大正11年12月生まれですが、大正天幕が亡くなった時に大人が黒い喪帯をつけていたのを覚えてます。その時すでに僕も日曜学校の幼稚科に入りました。その時幼稚科で聴えた歌は今でも覚えてます。キョウエンノ歌や、ほろほの歌、シカクノオウチ?	クリスチャンホームに育った、音楽一家庭、私の姉さんは石井十次っていう人があれがキリスト教だっかっていて理解した程、母は女で4番目、二番目の女の子がなくて、クリスチャンだった、教会に行くことは讃美歌を歌うこと、母の家は教会のたまりみだいなもので、教会の帰りみんな若い人来て、にぎやかに讃美歌を歌った。で、大正11年12月生まれ、大正天幕が亡くなった時に、すでに僕も日曜学校の幼稚科に入りました。幼稚園で唄えられた歌は今でも覚えてます。キョウエンノ歌や、ほろほの歌。	キリスト教と共にある生い立ち、祖父のキリスト教、教会、讃美歌、教会の青年が集う祖父の家、集った青年たちが歌った讃美歌とその雰囲気、生年月日、幼いころに教会で歌った歌。	教会活動に熱心なクリスチャン一家、青年たちの集う祖父宅、にぎやかに讃美歌を歌う雰囲気	
4	B	W教会の讃美歌を歌う会は、1年に23回で、毎回20人ですか。あれは僕も非常に特別であつたことと思ってますよ。集まった人が、いろんな教会の人が、重誼の会の人を中心であつたけど、それ以外の人もいたし、福内の教会の人が来てました。	広い地域からの参加者たち、前身の会のメンバー、	参加者の広がり	多々な所属	
5	C	いろんな人が讃美歌を歌う会に集まってるのは、その讃美歌を歌う会の、重誼唱歌の山の荘に集まった人たちは、それぞれ違う教会だっかってる。それで、その是非讃美歌を歌いたっていうことと、讃美歌が分かれたら、21はとてても嫌だっかってる。	異なる所属教会、現讃美歌を歌い続けたい	異なる所属教会、新讃美歌への抵抗	讃美歌2使用への抵抗	
6	A	うん。ぜったい嫌だ。絶対こういふ歌を歌おうって、それがね、すごいあつたわけ。それで集まってきたのね、違う教会の人ね、その21に変わっちゃったところもあつたわけ、W教会はね、まだ21だししゃなく、まだ21だけじゃなくって、現行讃美歌を混ぜてやってたからよかつたけど、切り替わっちゃった教会もあつたわけ。それがとてても嫌だっかってる。そういう人が多かった。そういう人が集まってきた。はしめね。	現行讃美歌を歌い続ける熱意、新讃美歌の採用と拒否	新讃美歌の拒否確認	54年際讃美歌使用継続への疑問	
7	A	ちょっと、全然違うことすいません。小学校から男女は何でもいい別にやっていたことが、戦前だね、戦前だね、男女一緒にやることができたのは教会なの。だからね、教会に行くっていうこととはね。	男女別学	教育の形式	男女別学	
8	B	それだね、戦前だね、男女一緒にやることができたのは教会なの。だからね、教会に行くっていうこととはね。	性質ない活動の場	男女会同	性質ない活動の場	
9	A	これかね、すこすくと、悪いことしてるみたい。	罪意識	遠隔行為	悪いことをしている感覚	
10	C	話してないね。なんでも、不思議ですね。なんかそういう世代だったんでね。	男女で話さない	男女の在り方	話し機会のない	
11	A	いや、世代っていうのは、日本の国全体がそうだったんですね。	一般的な在り方	日本の風潮	日本の風土	
12	A	いや、一緒に歌を歌えるだけで、特にね、合唄ね、男やけどソングやっつたらね。	男女の合唄	性質ない活動	性質ない活動	

32	C	そのままだという、・・・をたええるような歌じゃなきゃダメなのね日本は、讃美歌のままだしやないからねよく訳した、なるべくそこのほん伊沢さん、ほんわかと	讃美歌に基づいた訳、日本を刺さない訳、日本の担当者	讃美歌の影響を受ける訳	讃美歌に基づいた訳の歌
33	C	由木藤さんの讃美歌はよかった、訳してもね	作曲者名、評価、訳	作曲、訳の評価	作者への高評価
34	B	由木さんで、訳者の索引というのがあってね、こんなに訳してるとあれも訳してるとしょ、きよしこの夜、名作ですよ	作品数	半数を占める作品数	多数の高評価曲
35	C	この讃美歌ほんとい讃美歌ですよ。悪いけどなんかさ、讃美歌21なんかさ、やっぱりこれを作った人の時代がよかったのかな、どうだろう。	新讃美歌への批判、高評価の作詞者、作者の時代背景の評価	新讃美歌と旧讃美歌の比較	讃美歌21への批判、時代背景
36	I	歌詞がいいんですか。	優れた作品	作品評価	優れた歌詞
37	C	歌詞がものすごくいい	優れた作品	歌詞と曲の評価	優れたメロディー
38	B	歌詞がいいし、曲もいいね。	歌詞に合わせたところ、絶えず対歌詞に、歌詞に合わせたところではない。金田一晴彦さんが歌曲に対してはものすごく言うさく言うさく言ったに、お一人さんあがなように。21なんて、お一つでなんているのかわいはいあってやてやられないの、ポントにこれは歌詞とメロディーとかきれいに、1番から4番まで綺麗に絶対変な風にならないうように作られてるわけ	批評への反論、新たな歌への歴史的理	歴史的理、理解の促し
39	C	歌って絶対歌詞に、歌詞に合わせたところではない。金田一晴彦さんが歌曲に対してはものすごく言うさく言うさく言ったに、お一人さんあがなように。21なんて、お一つでなんているのかわいはいあってやてやられないの、ポントにこれは歌詞とメロディーとかきれいに、1番から4番まで綺麗に絶対変な風にならないうように作られてるわけ	歌詞とメロディーの良好な関係、言語学者の歌曲への提言、新讃美歌への批判、旧讃美歌の歌詞とメロディーの関係への高評価	歌詞とメロディーの関係と評価	歌詞とメロディーとの適切な関係、讃美歌21への批判
40	A	いかんとかいうんじゃないやなくて、時代の完結してるとっていうか、これは新しい形なんです。	批評に対する驚異、時代ごとの歌の特徴、歌の新たな形、500番代選択、両親の影響、歴史のある歌への高評価	批評への反論、新たな歌への歴史的理	歴史的理、理解の促し
41	A	あなた覚えるかもらなけれど、緑深き122番、あの讃美歌ができた時、当時においで富士山・・・好きだった。それは、500番代、おれは500番代は間違いない、僕らの頃の明治時代・・・僕らの両親とか、なにしてもね。900番代はいいにきまってる。明治時代から残ってきた歌が。	500番代選択、両親の影響、歴史のある歌への高評価	生き残った讃美歌への高評価	歌い継がれる讃美歌への興味
42	C	これKさんが好きだよ。あのね、直接関係ないですが、・・・的にね、わか強の悪いまつづ〜、口マッチクックというか、なよなよしてるとって感じに、キリスト教では聞こえる讃美歌っていうの、非常に好きなの、そういうの。	他者の好きな讃美歌、高齢者の好み、気持ちを引きつける讃美歌	他者の好み認知、年齢による選好、気持ちをつかむ歌	年齢による選好の違い、心を捉える讃美歌の存在
43	C	年取った方と書すと、いいますね、好きだ。心をとめる讃美歌とはどういうものなのかなって考えちゃいましたね。なんか人は、理屈っぽくキリスト教を語る人がいるの。	高齢者の好み、気持ちを可き付けられる讃美歌を問う、情理を語ることへの批判	気持ちを可き付けられる讃美歌を問う姿、勢と理屈への批判	心を捉える讃美歌を自問
44	C	たとえば、主我を愛す、ね、君、その感じて必ず出さずまきけれど、決して心をとめることかできたというの、決してその理屈っぽく、もちろん・・・だというのはあるんですけど、そういうんじゃないやなくて、人の心をホントに捉えるものとして讃美歌があるな、と私は、すごいなと思うんですよ。	発理で片づけられない選択理由、気持ちを可き付けられる讃美歌の価値	讃美歌の魅力	心を捉えるものとしての価値
45	B	それはいい歌はいいんです。絶対いいですよ。	良い歌の存在、ゆるぎない良さ	高評価讃美歌の存在	ゆるぎない評価
46	A	クリスチャンの人が、神様かどうかっていう理屈がはいってないような歌で、やっぱりその歌によって、かなえられてるとか、慰められてるとか、喜びになるんだな	情理のない歌詞、心をすする湯	歌詞内容に左右されない、心への影響	信仰の理屈のない歌、慰め、喜び
47	B	僕らは、すごい胸をもっている、仏教の人は仏像を奥れば自然に拝む気になるでしょ、キリスト教の人は讃美歌が仏像みたいな役割をするっていうかね、歌うだけでありかたかどうかっていうか、慰められてるっていうか、心が平安になるか、この役割をしているのが讃美歌だと思ってるよ。僕らは仏教に匹敵するくらい役割があると思えますよ。	優れた歌、心をしめ満足させる役割、讃美歌だと思ってるよ	讃美歌の優れた役割	感謝・慰め・平安の役割

48	C	先週、Hさんという方が、いらしゃるところにいらしてきてくださったんですよ。Hさんもよく讃美歌を歌う会によく出てらして、何かの調子で声があんまりでないんですよ。でも私たちがHさんがお好きだった讃美歌を取ったのね。そしたら、ホントに涙を流さんばかりに喜んでくださったって、嬉しかったんですけどね、じゃあこれからHさんこれまた歌いましょうねって、歌うのがすごく好きなんだって。	Hさんもよく讃美歌を歌う会によく出てらして、今入院してらして、何かの調子で声があんまりでないんですよ。お好きだった讃美歌を取った、ホントに涙を流さんばかりに喜んでくださったって、嬉しかったんですけどね、じゃあこれからHさんこれまた歌いましょうね	讃美歌を歌う会のメンバー、声がかかない、病院生活、見舞い時歌、感動の共有、生活に取り入れられる讃美歌	メンバーの入院、歌えないメンバー、見舞い時の歌、感動の共有、生活に取り入れられる讃美歌	活しきまでの価値
49	A	だから、やっぱり詩もメロディーも一流の人が作ってるのよ、ね。	歌詞と曲、優れた作者	優秀な讃美歌作者	一流作者による讃美歌	
50	A	今のやつは好きじゃないかな。	讃美歌21、好きでない	好きでない讃美歌の存在	讃美歌21批判	
51	I	ミッションスクールを経験がなくても、どこかで聞いたことがある人はいらっしゃるんですか。				
52	B	そうなんだよな。Aさんの会はいつもね、友だちを連れてきて、だから、ま、紹介者がいて好きな人か来るわけ、重誼の会も讃美歌の会も、だれか来てもいいわけ。	Aさんの会はいつもねだちを連れてきて、紹介者がいて好きな人か来るわけ、だれか来てもいいわけ	讃美歌の会の参加者、メンバーによる誘い、参加窓口の広さ	限定のない参加条件	
53	C	クリスチャンじゃない人いっぱいだけど、みんな讃美歌えましたね。歌えない人はいなくなっただね。	クリスチャンじゃない人いっぱい、みんな讃美歌歌えませんでしたね。	ノンクリスチャンの参加、歌唱可能	歌唱可能	
54	C	スズメはHさんが好きなのこれ。あれが信仰の原点になってる人いるわよ。90過ぎたおはあやまがね、讃美歌で心を慰えられてる人がいることを知ってなきやいけないわね。 そんな堅苦しい理屈ではないの、キリスト教っていうのは、最後一言ずつお願いします。	讃美歌による信仰の原点、高齢者、心をしずめ満足させる讃美歌、厳格な情理のないキリスト教	信仰に導く讃美歌、心に影響する讃美歌、厳格な情理ではない宗教	理屈のない信仰の原点	
56	B	リクエストでやるでしょ。あらかのページって司会者が指定するんだけど、その中でリクエストで何番で、それをピアノで弾きかけてくれるわけですよ。ピアノにしてみればもすごく大変な仕事だと思わんですよ。歌声喫茶みたいでね、ピアノにとってはこれもう大変なこと。これはもう面白いわね。で、そのおかげで参加者が他の人の聞いてレパートリーが増えるわけ。	リクエスト、ピアノが弾きかけてくれる、ピアノにしてみればもすごく大変、歌声喫茶みたいでね、ピアノにとってはこれもう大変なこと、これはもう面白いわね、そのおかげで参加者が他の人の聞いてレパートリーが増えるわけ。	選曲曲、伴奏者の変更、参加者の面白さ、歌のレパートリーの広がり	専業者の負担、リクエスト曲が歌える楽しさ、レパートリーの拡大	責任ある伴奏役理、伴奏付き、面白さ、
57	A	そういうことでできたのは、ひとえに、Cさん。	そういうことでできたのは、ひとえに、Cさん。	リクエスト曲で成り立つ会、ピアノの力	会成立の要因	奏業者の貢献
番号	テキスト		<1>テキスト中の注目すべき語句			<2>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)
ストーリーライン	本論に記す					
理論	本論に記す					
記述						

SCAT (Steps for Coding and Theorization) を使った質的データ分析

インタビュー

菊池みち子先生に聞く

聞き手・編集 伊勢田 奈 緒

2013年3月末日に退職される菊池みち子先生に、静岡英和女学院短期大学に来られてから現在に至るまでの37年間を振り返っていただき、先生の静岡英和に対する思いを語って頂きました。

—— 先生が静岡英和女学院短期大学（2002年に静岡英和学院大学となった）に来られたきっかけを教えてください。

菊池 初代学長であった松本卓夫先生の姪御さんがドイツでオルガン留学をしておられ、たまたま私もドイツへ留学して共通の教師に師事していただいていたようです。それまでは面識はありませんでした。しかし、帰国後、ドイツ人の先生が来日され、国際基督教大学でオルガンコンサートを開かれ、そのとき、彼女にお目に掛かる機会があったのです。そこで、静岡英和女学院大学でオルガニストを探しているところだと伺い、応募したのが、きっかけです。—— そうでしたか……。不思議なきっかけでしたね。ところで、先生はどれ位、英和におられたのですか？また、オルガニストとしてチャペルと共に歩んで来られたこれまでを振り返っていかがでしたか？

菊池 私は1975年からですから……。まあー！まるまる37年になります……。オルガニストとして礼拝の中でオルガンを弾けることは本当に感謝であり、喜びでした。私は学生と共に礼拝を通して自分自身も育てられたと思います。1990年にパイプオルガンを購入したのですが、一つ残念なのはペダル付のパイプオルガンを入れることができなかったことですね。

—— 37年の間、英和ではずっと礼拝を守ってこられたということですね。その間、

学長も宗教主任も何人も替わったということですね。……。それでは、当初のチャペルアワーと今のチャペルアワーで、先生から見て変わらないものと変わったものを教えてください。

菊池 そうですね……。まず、学院聖句は変わっていません（笑）。静岡英和女学院短期大学の時代は三枝記念講堂（1967年より）で礼拝を守っていました。その時代は一年生前期と二年生後期の学生が礼拝に出席していました。今の学生は讃美歌を歌わないですね。これは今の音楽教育にも原因があると思いますが……。チャペルの時間は今より長かったですね。当初は英和短大がキリスト教主義学園として存立することを目指し、また教職員は礼拝に皆、出席することになっていてそれがプレッシャーになっている教員もいたようです。今は、自由な雰囲気になっていますが……。

—— 本当に学生は讃美歌を歌ってくれませんね……。時々、私の声しか聞こえないような気がして、ぎょっとすることがありますが……。負けずに歌い続けたいと思います（笑）。チャペルがプレッシャー……。というのは、考えさせられます……。ね。今は一年生が全員出席となっていますが……。やはり一週間に一度、チャペルの時間だけでも神様に守られながら、自分と向き合う時間ができるのは精神的に豊かな、ぜいたくな……。英和生だけの特権のように思いますが……

！では、キリスト教に関する行事での思い出を教えてください。たくさんおありだと思いますが……特に……。

菊池 先ず、行事と言えば、スチューデント・リトリートです。当初はフレッシュマン・リトリートと言っていて、今のように入學直後に天城山荘において二泊三日で実施していました。(リトリートは1967年から現在に至るまで続けられています) 当時は毎年、テーマを決めてグループで議論したり、学生たちにとっては大変だったでしょうね……。ところが、宿泊先の関係で4月に出来ず、だんだん実施日が遅くなり6月に近づいていき、フレッシュではなくなっていました(笑)。私としてはこれからも続けていった方がよいと思います。学生達は楽しんでいるようですから。そういえば、聖歌隊が最盛期の頃、讃美歌コンクールをしたり、音楽専攻の学生達と一緒に、ハレルヤコーラスを盛大に歌ったこともありましたよ。清水光雄先生(伊勢田の前の宗教主任)の時代はクリスマス礼拝の日、3時限めは全学的に授業がなく、クリスマス礼拝に続いてクリスマス会をしていました。クリスマス・ページェント(クリスマス劇)を作って教員が演じたりしていました。とても懐かしいです。

—— 昔も色々な行事があり、それが今も継続しているということですね。去年は学生によるクリスマス劇(靴屋のマルチン)をしましたが……。それでは、先生のお好きな聖書箇所と讃美歌を教えてください。

菊池 聖書箇所は第一に学院聖句ですね……。それから「コリントの信徒への手紙」II 5章9節「だから、体を住みかとしても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。」と、「テサロニケの信徒への手紙」I 5章16~18節「いつも喜んでいなさい。絶えず、祈りなさい。どんなことにも

感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」ですね。讃美歌はたくさんあって、困ります(笑)。でも選ぶとすれば、讃美歌一編2番と9番と68番と136番と267番ですね。コーラルが特に好きです。

—— 私も好きな讃美歌を挙げたら、きりがありません(笑)。では、これからの静岡英和学院大学へ贈る言葉をお願いします。

菊池 そうですね……。礼拝は静岡英和学院大学がキリスト教精神に基づく建学の精神を示す場であり、この大学の根幹であると思います。水曜日のチャペルの時間は学生がこれから生きていく時にも、また色々な状況に遭遇した時にも、きっと、力になってきた……力になっている……力になっていくと思いますので、引き続き大事にして欲しいと思います。また、先生方にも出ていただきたいと願っています。

—— 今日は本当にいろいろお伺いいたしました。ありがとうございます。それでは、何かほかに、ありましたら、お願いします。

菊池 伝統のある学校ですから末長く続いていくことを切に祈っております。

—— まあ！ありがとうございます。先生、チャペルにおいて、これまで休まず、素晴らしいオルガンの奏楽をしていただきましてありがとうございました。



2012年度 チャペルとキリスト教行事	
3月	卒業礼拝：近藤勝彦（東京神学大学学長）「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい」（15日10時半～） 教職員全体会：近藤勝彦（東京神学大学学長）「キリスト教大学の困難と慰め」（15日13時～14時半） W303
4月	礼拝（毎週水曜日） 始業礼拝・武藤元昭学長「神の前に謙虚に」（3日） スチューデントトリトリート（ラフォーレ修善寺一泊、大湧谷、星の王子さまミュージアム）（大学11～12日／短大10～11日） イースター礼拝・伊勢田奈緒「イースターと鈍感な弟子たち」（18日）（イースターキャンディーを配布） 柴田敏「主は羊飼い 私たちは羊の群れ」（25日）
5月	学生礼拝：安藤昌平（人間1年）市川ティナ（人間1年）徳江康文（コミ福1年）陸梅（現コミ1年） 原亜衣（食物1年）「リトリートを振り返って」（2日） 伊勢田奈緒「油断大敵！」（9日） 横田弘行先生（ブルンジ難民支援の会代表）「絆、繋がる時の大切さ」（16日） 伊勢田奈緒「重圧とため息から脱出」（23日） 鈴木幸子「祈り、祈られること」（30日）
6月	伊勢田奈緒『『恐れるな』そして『恐れなさい！』』（6日） 武藤元昭学長「求めなさい」（13日） 中原陽三「あなたを愛し、救おうと働く神」（20日） 学生礼拝：金福姫（人間1年）内野友莉（コミ福1年）SIERRA ABEGAIL LICO（現コミ1年）田中智信（食物1年）「3ヶ月を振り返ってみて」（27日）
7月	第三回ワンコインコンサート開催（3日～6日） アイザット「What lifts you up?」（4日） 伊勢田奈緒「アンパンマンのような心をもって正義を生きよう」（11日） 武藤元昭学長「謙虚ということ」（18日）
8月	
9月	武藤元昭学長「神は愛」（26日）
10月	伊勢田奈緒「暗黒を朝に変えよう！」（3日） 柴田敏「祈る時には」（10日） 学生礼拝：小幡真子（現コミ2年）張静（人間2年）金星女（人間3年）増田飛鳥（人間4年）「今、一年生に伝えたいこと！」（17日） クレイナー「In Tune With Jesus」（24日） 伊勢田奈緒「エリシャの涙の意味」（31日） 第四回クリスマスカードコンテスト（応募期間：1～30日）
11月	見平隆「どう生きたか」（7日） 武藤元昭学長「仕える者」（14日） 創立記念礼拝：近藤泰雄（静岡英和女学院中学校・高等学校校長）「キリストにある友人」（21日） 伊勢田奈緒「日の出に向かって！」（28日） 楓祭に参加（クリスマスの部屋【グローリア】宗教部＋学生有志）（3、4日） クリスマス・イルミネーション点灯（11月28日～1月10日）
12月	学生礼拝：池谷陸、于永亮、黄華？（人間1年）杉山優稀、森政遼香（コミ福1年）ドアン・ドック・フー（現コミ1年）竹下淳也（食物1年）「今年を振り返って！」（5日） 柴田敏「罪を背負ってお生まれになった主イエス」（12日） クリスマス礼拝・クリスマスメッセージ：伊勢田奈緒「光を見つめましょう」／クリスマス劇『くつやのマルチン』（I S E D A劇団【増田祐己（地域福祉学科3年）他有志学生】（19日） クリスマス・キャンドル・サービス＋クリスマス祝会（19日午後6時～W303にて）
1月	伊勢田奈緒「みんなで喜びことができますか？」（9日） 武藤元昭学長「神の恵み」（16日）

キリスト教大学の困難と慰め

近藤 勝彦

はじめに

種々の難問にとりまかれた現代の大学、その研究と教育

1、キリスト教大学とは何か

- a. 大学の成立とキリスト教文化史
- b. 近代憲法における「結社の自由」に基づく理想を持った研究と教育のための自発的共同体、建学の精神の意味、
- c. キリスト教大学のキリスト教的性格、キリスト者教員が教えているだけでなく、祈りを持った教育と研究（大江健三郎氏の信仰なき者の祈り、大いなる方との信頼を込めた語らい）、聖書によって超越からの御言葉に聞く、礼拝を行う大学
- d. 大きな概念としての「神の真理」、真理の多元主義、相対主義を越えて

2、キリスト教大学の困難

- a. 現代における言語不通の状況、キリスト者と非キリスト者、学問の専門分化と言語不通、世代間断絶、教師と学生の言語不通、教師間・学生間の断絶
- b. 理想を抱く者の困難、現実とのギャップの大きさ、「律法が入り込んできたのは、罪が増し加わるため」、神の真理と分化した学問、真実の人間教育に賭ける、

3、キリスト教大学の慰め

- a. 律法ではなく恵みとしてのキリスト教大学、人間の業に先立つ賜物がある。「わたしたちは律法の下ではなく、恵みの下にいる」（ロマ6・15）
- b. 断絶を埋めるもの—大学の可能性を支持する恵みの真理概念、未知なるものへの信頼による研究、研究を支えるアスケーゼの根拠
- c. 教育を支えるもの—「成長させるかた」への信頼、教育者の徳（忍耐、寛大さ、愛、誠実）の根拠としての「主イエスに仕えられている経験」

『キリスト教研究年報』執筆要綱

- 1 本誌は、静岡英和学院大学キリスト者教員の研究年報誌であり、該当教員の研究論文、その他キリスト教関連の記事（チャペルなど）を掲載する。
- 2 編集委員会は、委員長および若干名によって構成する。
- 3 委員長は宗教主任とする。
- 4 原稿の掲載は編集委員会の審議を経て決定する。
- 5 執筆者による校正は3校までとし、その際大きな修正は原則として認められない。

投稿要項

- 1 論文原稿は、未発表のものに限る。
- 2 原稿について
 - ①原稿は原則として横書きとする。原稿は、電子媒体としてメモリ・ディスクを提出すること。
 - ②「論文」は16000字以内（注・図表等込み）の完全原稿とする。
 - ③「研究ノート」は12000字以内（注・図表等込み）。論文としての完成度は要求されないが、新たな方法論や視点を提供する内容であること。
 - ④原稿のコピーは本人の責任において必ずとっておくこと。
 - ⑤使用ソフトはMSワードとし、文字フォントについては原則、和文が明朝体、欧文がCentury体とする。
 - ⑥原稿の文字の大きさ（ポイント）は10.5ポイントとする。
 - ⑦原稿の用紙設定は、B5・縦置き・横書き、マージン（余白）は天（上）25mm、地（下）20mm、左右はともに25mmとする。
 - ⑧原稿の字数設定は、1行半角80字（全角40字）、各ページ44行とする。
 - ⑨印刷所入稿後校正は、3校までとし、著者によって行う。

編集後記

昨年、「キリスト教と音楽」というテーマの下、4名のクリスチャン教員（菊池みち子、山田美代子、鈴木幸子、伊勢田奈緒）が集まり、それぞれの専門立場において研究し、発表する機会が与えられました。このテーマは菊池みち子先生の退官を記念して、提案しました。現代は現実主義の時代であり、高校はどこの大学へ入れるかで、ランクが付き、また大学は就職率でその価値が決まる……といった味気ない社会になっているように思います。その観点からみれば、キリスト教を学ぶ意味、音楽を学ぶ意味は就職になんの関係があるの？となってしまうかもしれません。しかし、そうでしょうか？たとえば、学生にとって、就職活動は大事なことですが、その活動を横軸として考えれば、縦軸として、学生の精神面を支えるもの、そして癒すものが私達の大学におけるキリスト教精神であり、礼拝での音楽ではないでしょうか？

創刊にあたり、『キリスト教研究年報』が、日々の仕事に忙殺されつつも、静岡英和学院大学のクリスチャン教員が改めて自身のキリスト教信仰と向き合い、各々の専門分野とキリスト教との関わりを通して、研究していく場となればと思います。また、学内の教員には少しでもキリスト教に関心をもっていただくため、さらに、学外の同じキリスト教学校には静岡英和学院大学のクリスチャン研究者を知ってもらおう機会となればと思います。そうは言っても編者はこのような学術刊行物を編集したのは初めてであり、正直なところ、途中で投げ出したくなりました。しかし「エレミヤ書」29章11節「わたしはあなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」や、「イザヤ書」35章3節～4節「弱った手に力を込め、よろめく膝を強くせよ。心おののく人々に言え。「雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる。」の御言葉に励まされつつ、なんとか、創刊することが出来ました。

今回の内容について、少しコメントさせていただきますと、学長の言葉には次号はますます奮起しなければと身がひきしまる思いです。次号でもっと、執筆者が集まることを願うばかりです。続いて、現代コミュニケーション学科の菊池みち子先生によるバッハの世界ですが、先生がどれほど、バッハに思いを馳せ、研究し、また演奏されてきたかがわかります。次は拙著のものですが、マルティン・ルターの宗教改革運動の中から生まれたものは原典から翻訳した自国語（ドイツ語）聖書だけでなく、自国語による賛美歌集も新しく作られたのであり、その意義について音楽学や礼拝学からではなく、歴史神学の立場から考察しています。次はコミュニティー福祉学科の鈴木幸子先生による「高齢者における讃美歌を歌う会の意味」は先生が実際に教会に行かれた丁寧なインタビューによる分析よって考察されたもので興味深いものです。菊池みち子先生とのインタビューは紙面の都合があり、短いものとなりましたが、先生のこれまでのお話を色々伺い、楽しいインタビュータイムでした。また昨年、3月14日に行われた教職員研修会の際、配布された東京神学大学学長の近藤勝彦先生のレジュメも入れることができました。最後に、今回、静岡英和学院大学において「キリスト教研究年報」を創刊することができましたことを心から感謝いたします。

宗教主任 伊勢田 奈 緒

キリスト教研究年報 創刊号
Christianity Study Annual

2013年3月31日印刷

2013年3月31日発行

編集 「キリスト教研究年報」編集委員会
発行 静岡英和学院大学キリスト教研究会
静岡市駿河区池田1769番地
電話(054)261-9201
印刷所 株式会社 篠原印刷所
静岡市駿河区登呂6-7-5
電話(054)286-5141